

夏目漱石の世界

こころ (先生と遺書)

はじめに

さて、今回の夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『先生と遺書』（下）という第三部の「内容」であるが、それは、まず、冒頭は、先生からの「長い手紙」であり、それは、「……（以前）あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼ったが、その時は、他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。その義務からとは別として私の過去を書いておきたいのです。私の過去は私だけの経験であり、私だけの所有と言っても差支ないものであり、それを人に与えないで死ぬのは、私にも惜しいという多少そんな心持があるのです。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思うのです。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ますと、その「生い立ち」から語り始めるのである。

*

*

先ず、先生という人の「生い立ち」であるが、先生が両親を亡くしたのは、まだ二十歳にならない時分（恐らく中学三年の頃）であり、二人は同じ病氣（それは腸チフス）で死んだのでした。しかも、殆んど同時と言ってはいくらいであり、それが傍にいて看護した母に伝染したのでした。先生は二人の間に出来たたった一人の男の子であり、家には相当の財産（旧家）であったので、むしろ鷹揚に育てられました。

さて、両親の死後、先生という人は、東京へ出て高等学校に入ります。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしましたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産」は、出来るだけ金に換えたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にすることが出来たのです。そこで、騒々しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、たまたま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家の話を聞いて、そこに下宿することになるのである。

つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとそのお嬢さんとも親しくなれるとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたのです。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかったため、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになる。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配し

ていたことだろうと思うが、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」になるのである。

さて、学業の方は、二人とも大学二年を終えて、大学三年（九月新学期）になる前の「夏休み」にどこかへ行くこうかとKとあれこれ相談し議論するも決まらず、奥さんが仲に入り、結局、二人で「房州への旅」へ出ることになるが、やがて、二人は真黒になって東京へと帰って来る。宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚くが、それは、ただ色が黒くなっただけではなく、むやみと歩いたので大変瘡（やせ）ってしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったと言って賞（ほめ）てくれるが、一方、お嬢さんは母親の矛盾がおかしいと言ってまた笑い出すのでした。ところで、お嬢さんの態度が前とは少し違って、私の方をすべて先にして、Kを後廻し（わじまわ）しにするように見えたのです。——しかし、そのようなことも数ヶ月経つと、やがてお嬢さんの態度がだんだん平気になって来て、Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室（へや）の縁側へ来て彼の名を呼んだり、そこへ入って、ゆっくりしていました。むろん、郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるので、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有（せんゆう）したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えて、先生は親友の「K」に対する嫉妬（しよ）心をより深めていくのである。

やがて、年が開けて正月になり、ある日、内々（うちうち）だけで歌留多（かるた）をすることがあったが、それから二、三日経った頃、奥さんとお嬢さんは朝から親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃で、二人は室（へや）で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖（ふすま）を開けて、Kの方から私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐（すわ）り、奥さんとお嬢さんはどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するが、やがて、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、先生は、「あつ、しまった！」という想いに強く襲（おそ）われるのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち明けようと思いつつも、なかなか言い出せざるところを、Kに先越（さきこ）されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さんのことが好きだということ、なかなか言い出せざるところです。

そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるといふ、そういう悶々とした「想い」の状態のまま暫（しばら）くは続くが、その後、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」は、ことばかりに一気に「反撃」に出るのである。それはお嬢さんを絶対に失いたくない、という一心からだったと思うが、この時の「対応（策略）」と、もう一つは、とにかく、Kよりも先に奥さんに「……お嬢さんを下さい」と「結婚の申し入れ」をすることで、奥さんの承諾を得ようとする、この二つの「反撃」によって、親友である「K」を攻撃し、その結果として、先生は、お嬢さんを得、一方、「K」という人は、「自殺」をしてしまう。そのために、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲（おそ）われ、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かじやく）」）というものに長く悩まされ苦しむことになるのである。

やがて、奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭（いや）がり、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上今おる家へ引越（ひっこ）すことになる。移って二カ月ほどして

私は無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚したのです。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども私の幸福には「黒い影」が随きまどつていました。

しかも、一年経ってもそのKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安であり、私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めたり、また、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もありましたが、結局はうまくいかなかったのです。そのうち、妻の母が病気になり、医者に見せると到底癒らないという診断であり、私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしました。これは病人自身のためでもあり、愛する妻のためでもあり、もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。そして、幾分でも善い事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分支配されていたのです。

すると、夏の暑い盛りに明治天皇が崩御され、それから約一カ月半ほど後、御大葬の夜、私はいつも通り書齋に坐って、相図の号砲を明治が永久に去った報知のごとく聞き、また、それが乃木大将の永久に去った報知(殉死)にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしました。——私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。「…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という内容になっていくのである。

ところで、この第三部の「先生と遺書」というのは、それぞれ「本文」＋「*」＋「解説」という構成になっていて、「…：最初から最後まで、一字一句、丁寧に読み辿りながら深く考察したもの」であり、それゆえ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

下、 先生と遺書

- 一、 冒頭の文章（長い手紙）
- 二、 私の過去のすべてを……
- 三、 先生の生い立ち
- 四、 父親と叔父（その実の弟）との関係
最初の夏休みの帰省
- 五、 二度目の夏休みの帰省
- 六、 三度目の夏休みの帰省
- 七、 家の財産のこと
- 八、 叔父に財産を誤魔化される
- 九、 * *
- 十、 新たな下宿先を見つける
- 十一、 八畳の部屋の様子
- 十二、 先生の心の状態
- 十三、 奥さんとお嬢さんと先生との関係
- 十四、 奥さんの思い
- 十五、 奥さんの態度と先生の心模様
- 十六、 茶の間がお嬢さんの室で男の声がすると
- 十七、 三人で着物を買に出る
- 十八、 奥さんとお嬢さんの気持ち
* *
- 十九、 Kという親友の登場
- 二十、 Kの三年間の夏休みの過ごし方
- 二十一、 Kの養子縁組の破綻
- 二十二、 先生の下宿先に同居するまでの経緯
- 二十三、 Kが四畳の室に移り住む
- 二十四、 Kの性格と特徴
- 二十五、 Kの心が段々打ち解けて来る
- 二十六、 Kとお嬢さんだけの状況
- 二十七、 二度目のKとお嬢さんだけの状況
* *
- 二十八、 房州への夏休みの旅
- 二十九、 Kと自分とを比較してみると

- 三十、日蓮の誕生寺と鯉たんじょうでら こい
- 三一、人間らしさについての議論
- 三二、旅行後のお嬢さんの態度
- 三三、糠ぬかる道でKとお嬢さんに遭う
- 三四、先生のKに対する嫉妬心
- *
- 三五、正月に歌留多かるた取りをする
- 三六、Kのお嬢さんへの恋心の告白
- 三七、Kの告白後の先生の心の状態
- 三八、二人は寡黙かもくで夕飯ゆうめしを食べて、床に就く
- 三九、Kに告白の真意を聞く
- *
- 四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る
- 四十、上野公園で先生にどう思うかと尋ねる
- 四一、先生のKに対する最初の反撃
- 四二、先生の最初の反撃に対するKの反応
- 四三、上野うえのから帰った晩、二人は……
- 四四、覚悟という言葉と奥さんへの談判
- 四五、お嬢さんを下さいと奥さんに言う
- 四六、外を歩き回まわって、宅うちに帰る
- 四七、奥さんはKに二人の結婚話をする
- 四八、二、三日後、Kの自殺
- 四九、奥さんにKの自殺を告げる
- 五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処
- * *
- 五一、Kはなぜ自殺したかと問われる
- 五二、Kの亡霊から逃のがれるために読書を……
- 五三、Kの亡霊から逃のがれるために飲酒を……
- 五四、やがて奥さんの病氣と死
- 五五、うつ脳の牢獄らうごくに閉じ込められて
- 五六、乃木大将のぎの殉死じゆんじを契機けいに自殺じくを決心する

※ 参考文献

第三部 (先生と遺書)

目次

下 先生と遺書

序

さて、いよいよ「先生と遺書」という第三部の「内容」になるが、それは、まさに「先生」（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それは、いわば「内的事実」であり、例えば、「先生」（自分）という人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」の描写である。そして、その「内的世界」を敢えて「三つ」に分けてみると、一つは、「表面的部分」であり、それは、その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、一つは、「中間的部分」であり、それは、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、そして、もう一つは、「深層的部分」であり、それは、その人（先生）の「頭の中」（或いは「心の中」）に蓄えられている、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）であるが、その中から様々な「経験や想い出その他」などを自ら語る（描写）するというものである。そして、『こころ』という作品の主人公である「先生」の場合には、次のような「内容」になつていくのである。

一、冒頭の文章（長い手紙）

「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮していると言つた方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢てする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩らつていたところなのです。このまま人間の中に残り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のように。私は卑怯でした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶したのです。遺憾ながら、その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかつたと言つても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。私は状態へあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言つて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無難な

言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝りたいと思います。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛けて、今東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったと見えて、また後から長い手紙を寄こしてくれました。あなたの東京出来ない事情がよく解りました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。そのお父さんの生死を忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。その癖あなたが東京にいる頃には、難症だからよく注意しなくってはいけなないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。或は私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我を認めています。あなたに許して貰わなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打つたのは、それがためです。(本文)

*

*

では、いよいよ第三部の「先生と遺書」であるが、その「冒頭の文章」は、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思ったのです。しかし、自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。(中略)、実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩っていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、「それとも……」という言葉を中心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。その時の私には、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとってまるで無意味であり、どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。宅に相應の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といって藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。

その後、私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたのです。ところが、今、東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。後からの手紙で、東京出来ない事情がよく解りました。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。

——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思
いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書
かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの
手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばな
いという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです」とある。

*

*

先ず、ここまでの文章で大事なことは、次のようなことである。それは、「私」という
人が「先生」に条件の好い（就職先の依頼の）手紙を出した時、先生は、まさに「……こ
の自分をどうすれば好いのかと思ひ煩うていたところであり、このまま人間の中に取り
残されたミイラのように存在して行こうか、それともいっそ『自殺』しようかと深く悩み
苦しんでいたところだった」のである。そのような時に、まさに明治天皇の「崩御」の報
道を新聞で読み、それから約一ヶ月半後、「御大葬の夜」の時、（夜八時ごろ）、今度は「乃木
大将の殉死」を号外で知り、思わず妻に殉死だ殉死だと言ったことや、また、新聞で乃木
大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生の「心の中」に或る「決
定的な想ひ」が生じて来たということである。それは、この時、先生は、はっきりと「私」
という人に「自分の過去をすべて語ること」を決心したということである。

そこで、先生は、「私」に電報を打つが、それは、「……あの時私は一寸あなたに会
たかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたの
です」とある。まず、ここまでは、最初、先生は、「……相手（私）に直接会つて、希望
通り私の過去の話をしようと考えていた」のである。それゆえ、この時は、まだ「自殺」
までは考えてはいなかつた。ところが、「……今、東京へは出られないと断つて来たので、
私は失望して永らくあの電報を眺めていた」が、二日後、今度は、「来ないでもよるしい」
という電報を打つて来ることになる。それは、一体、どういう理由からかと問えば、それ
は、この「二日間」のうちに、先生の「考え方」が大きく変化したからである。それは、
「……相手（私）に直接会つて、私の過去の話が出来ないならば、むしろ遺書という手紙
の形で自分の思ひを語ることができないのではないか」という、そういう「想ひ」がふと
浮かんで来たのである。それは、一体、なぜなのか？ その最も根源的な「理由」の一つ
には、やはり先生には長年の「自殺願望」があり、その「自殺願望」を「遺書」という形
で、まさに遂行でき得るからであるが、それに加えて、相手（私）に直接会つて話をする
よりも、むしろ「遺書」という形の方が、まさに自分の「考えや想ひ」などをすべて（一
つ残らず）正直に語ることができ得るとともに、いつまでも「遺書」（手紙）として「私」
という人の手元に残ることにもなるからである。

二、私の過去のすべてを……

さて、「……私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、
自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、
あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を
擱いても、何にもなりません。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。
あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れませ

ん。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、殆んど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれを出来るだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、御覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言っても差支ないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といる日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違つたところがあるかも知れません。しかしどう間違つても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思ふのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解つていてでしょう。私はあなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足りなそうな顔をちよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼つた。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(本文)

* * *

さて、先生は、二度目の電報を打つてから「この手紙」を書き出したとある。「……平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でもあり、何度か筆を擱こうとしましたが、——結局、私は書きたいのです。あなたへの義務は別として、私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言つてもよいでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるが、私に

も多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから」とある。

まず、先生という人は、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」は誰もいなかった。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語ってもよいと思えて来たということである。そこで、最初は、彼に直接話そうとして電報を打ったが、父親が重篤で来れないというので、そこで、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）ではふと「遺書」という形で語ることもでき得るのではないかという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを讀んだ若者も、きっと自分の「想い」をしつかり受け留めてくれるだろう。「……私は何千万という日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから……」とある。つまり、先生という人は、一体、誰のためにこのような「遺書」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分（先生）が実際の人生の中で経験した「心の闇」（「罪と罰」）とを、敢えてここに書き遺しておきたかったのである。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。——私は（若い）あなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなそうな顔をちよよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。その時、初めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を吸ろうとしたからです。（これは先生の実際の人生の中で経験して得た「生きた教訓」を得たいと言ったから）。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であった。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」とある。

これは、もう「作者」（夏目漱石）の『「ころろ」という作品の、まさに「核部分」そのものである、——つまり、自分の「過去」の経験から、このような「思想」（或いは「作品」）が生み出されたということであり、「……私は暗い人世の影を遠慮なくあなた（読

者)の頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じと見詰め
て、その中から貴方の参考になるものをお攫つかみなさい」と言っているのである。
* * *

三、先生の生い立ち

三、先生の生い立ち

「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。何時か妻があなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、殆んど同時と言っていていくらいに、前後して死んだのです。実を言うと、父の病気は恐るべき腸窒扶斯でした。それが傍にいて看護をした母に伝染したのです。」

私は二人の間に出来たたった一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうにと思います。

私は二人の後に茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいた事が出来ませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覺っていたか、又は傍のものの言うごとく、實際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分かりません。母はただ叔父に万事を頼んでいました。そこに居合せた私を指さすようにして、「……この子をどうぞ何分」と言いました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出る筈になっていましたので、母はそれも序でに言うつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後を引き取って、「……よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得る体質の女なんでしょうか、叔父は「確かりしたものだ」と言つて、私に向つて母の事を褒めていました。しかしこれが果して母の遺言であつたのかどうだか、今考えると分らないのです。母は無論父の罹つた病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだ幾らでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向記憶となつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風に物を解きほいで見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却つて役に立ちはしないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだろうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向つて、積極的に大きな力を添えているのは慥です。だから覚えていて下さい。

話が本筋をはずれると、分り悪くなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、或は多少落ち付いていやしくないかと思つていられるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響きももう途絶えました。雨戸の外にはいつの間にか憐れな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微かに鳴いています。何も知らない妻は次の室で無邪気にすやすや寝入っています。私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。

私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思います。(本文)

*

*

まず最初は、主人公である「先生」という人の「生い立ち」であるが、それは、次のようなものである。それを要約すると、「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の二十歳にならない時分でした。二人は同じ病気で死んだのです。しかも殆んど同時と言っているくらいであり、父の病気は、腸チフスでした。それが傍にいて看護した母に伝染したのです。私は二人の間に出来た一人の男の子でした。家には相当の財産があったので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうにと思えます」とある。

これは、つまり、あの時、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていくれたならば、当然のことながら、叔父(父親の実の弟)に家の相当の財産の多くを騙し取られることもなく、それゆえ、(人を深く疑ったり恨むようなことも知らずに)、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうに思うのです。ところが、実際は、両親をほぼ当時に失い、私は二人のあとに茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。とにかくたった一人残された私は、母の言いつけ通り、伯父を頼るよりほかに途はなかつたのです。しかし、その伯父によって、家の財産の多くを騙し取られてしまい、それ以来、他人の徳義心を疑うようになったのです。簡単に言えば、人間が信じられなくなったということなのです。

それには、「……こういう風に物を解きほどこいて見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却って役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥です。だから覚えていて下さい」とあるが、それは、つまり、もともと先生にはあれこれ物事を疑ったりあれやこれやと考えをめぐらしたりする性分があり、それに、伯父による家の財産の多くを騙し取られるという様なことなどが加わり、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。そして、今、先生は、深夜、何も知らない妻は、次の室で無邪気にすやすやや寝入っているその中で、私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思いますとあり、それは、一度、(心の底からの)「決心」(覚悟)が出来れば、あとはむしろ落ち着いた気分になれるということなのかも知れない。

四、父親と叔父(その実の弟)との関係

「……とにかくたった一人取り残された私は、母の言い付け通り、この叔父を頼るより外

に途はなかったのです。叔父はまた一切を引き受けて凡ての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしてる間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせざるに済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。(無論物価も違いました)。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらる方だったのでしよう。というのは、私は月々極ら回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしよう。というのは、私は月々極った送金の外に、書籍費、(私はその時分から書物を買う事が好きでした)、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましよう、政党にも縁故があったように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格から言うとうと父とはまるで違った方へ向いて発達した様にも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画骨董と言った風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたけれども、二里ばかり隔たった市、——その市には叔父が住んでいたのです、——その市から時々道具屋が懸物だの、香炉だのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父は一口に言うとうと、まあマン・オフ・ミーンズ(資産家)とでも評したら好いのでしょうか。比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったので。だから気性から言うとうと、闊達な叔父とは余程の懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が良かったのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父は寧ろ私の心得になるつもりで、それを言ったらしく思われます。「……お前もよく覚えていたが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になつていたので。 (本文)

*

*

さて、「……私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会される所でした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせず済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもっていたのです。（当然先生もその質朴をもっていたのだらう）。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。（無論物価も違いましようが）。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらる憐れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしょう。というのは、私は月々極った送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係から、政党にも縁故があったように記憶しています。父の「実の弟」ですが、そういう点で、性格から言うと父とはまるで違った方向へと発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だの、また、詩集などを読む事も好きでした。書画骨董といった風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたが、二里ばかり隔たった市には、叔父が住んでいたのです。父は、比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったので、だから気性から言うと、闊達な叔父とはよほどの懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。「……お前もよく覚えているが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょうか。

つまり、両親の死後、私（先生）は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、その三年の間に、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのところの「本文」は、次の章からであるが、当時の入学（新学期）は、九月であり、卒業（学期末）は、七月であり、それから夏休みに入るのである。

*

*

五、最初の夏休みの帰省

五、最初の夏休みの帰省

「……私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、それでもするより外に仕方がなかったのです。」

叔父はその頃市にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合から言えば、今までの居宅に寝起きする方が、二里も隔った私の家に移るより遙かに便利だと言っていました。これは私の父母が亡くなった後、どう邸を始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩れた言葉であります。私の家は古い歴史をもっているのです、少しはその界限で人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎では由緒のある家を、相続人があるのに壊したり売ったりするのは大事件です。今の私ならその位の事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、甚だ処置に苦しんだのです。

叔父は仕方なしに私の空家へ這入る事を承諾してくれました。しかし市の方にある住居もそのままにしておいて、両方の間を往ったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困ると言いました。私に固より異議のありよう筈がありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好い位に考えていたのです。

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていました。学校へ出る子供などは平生恐らく市の方にいたのでしょうか、これも休暇のために田舎へ遊び半分と言った格で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、却って賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりやりました。叔父はもと私の部屋になっていた一間を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少くないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父は御前の宅だからと言って、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を叔父の家族と共に過ごして、又東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしる薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然断りました。三度目には此方からとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単純でした。早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろと言うだけなのです。家は休暇になって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続

する、それには嫁が必要だから貰う、両方とも理屈としては一通り聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解ります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったのでしょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るように、遙か先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。(本文)

*

*

さて、私は、最初の夏休み、初めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、叔父夫婦が住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束であり、叔父は、その頃、市にある色々な会社に関係していて、業務の都合から言えば、今までの居宅の方が、私の家に移るより遙かに便利だと言って笑いましたが、私の家は古い歴史をもち、由緒ある家でもあり、田舎では勝手に壊したり売ったりするのは大事件で、そこで、叔父は、仕方なしに私の空家へはいることを承諾し、それは、両方の間を(自由に)行き来できる便宜を与えてほしいという条件のもと、私はどんな条件でも東京へ出られれば好いくらいに考えていたのです。(これは叔父を信じ切っていたので、仕方のない判断になるのだろうが、もしここに何らかの教訓があるとすれば、それは、たとえ誰であれ、「……人間を百%信じ切って、すべてを相手に任せ、きるようなことは極めて危険である」ということである。)

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ましたとある。——例えば、今日でも北は北海道から南は沖縄まで実に様々な地方から東京の大学へと入学した大学生たちは、夏休みになれば、もちろん、そのまま東京に残る人たちも多いだろうが、また、自分の実家へと帰省する人たちも実に数多くいるかと思うが、それは、すでに「明治の時代」から盛んに行われていたということであり、それを可能にしたのは、まさに「鉄道」(汽車)の全国的な普及であり、第二部の終わりのところでも、「私」という人は、停車場まで人力車を急がせ、それから「三等列車」に乗って東京へと向かったとあるのです。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていて、みんな私の顔を見て喜びました。私は父母の時よりも、かえって賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりました。私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を、叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つ、私の心に薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私は、初めは驚いただけでしたが、二度目ははつきり断り、三度目はその理由を反問したほどである。彼らの主意は単簡で、早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。田舎の事情を知っている私には、よく解り、私も絶対にそれを嫌ってはいなかったが、承諾を与えないまま、その家を去りました。

六、二度目の夏休みの帰省

「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別な境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼ねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしよう。後から考えると、私自身が既にその組だったので、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李を絡めて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われない前から、覺つていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつていたのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衍しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。当人に望みのない私にはどつちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭な顔をしました。従妹は泣きました。私に添われなから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私

はまた東京へ出ました。(本文)

*

*

さて、「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼ねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしょう。後から考えると、私自身が既にその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。(これは漱石自身の学生の頃の書生の雰囲気などを思い出しながら書いているのかも知れない。)

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われぬ前から、覺っていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。

さて、叔父は、その「結婚相手」として、叔父の「娘」すなわち私の従妹に当る女性を言つて来たが、その時に、先生がもし自分には密かに「心に決めた女性」がいて、その女性と結婚する約束になつていると言つたらどうだったのだろうか？ というのも、叔父が結婚を勧める理由は、「……彼らの主意は単簡(簡單)で、早く嫁を貰つてこの家へ帰つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです」とあるからです。それに対して、叔父が「……いや、自分の娘とせ、ひとも結婚してほしい」と強く迫るとすれば、それは、一体、なぜなのか？ 例えば、叔父の「娘」が先生のことを死ぬほど好きだと言うのだろうか？ もちろん、そうではない。(このことは、やがて後で出てくるが、「……結局、叔父は、市の方に妾をもつようになるが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました」とある。また、その外にも色々叔父についての噂はあつて、一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つとしてあり、つまり、先生の家の「財産」をそのようなところにすでに使い込んでいたのである。)

私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつているのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家

へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかったのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衿してゐるかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺激の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。『……香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われたいのです』とある。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。(例えば、恋人や新婚の頃と、何年も経った夫婦とでは当然違つて来るようなものである)。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。(これは先生にまだ分別のないうちに早く決めてしまいたいのだが)、当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は「厭な顔」をしました。(それは自分の思い通りにならないからであり)、従妹は泣きました。私に添われぬから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かったからです。(拒絶されるのは、自分に女としての魅力がないからかとうような思ひである)。私が従妹を愛していない如く、従妹も私を愛していない事は、(親しい気持ちと愛する気持ちとは別であることは)、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

七、三度目の夏休みの帰省

「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私は何時でも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかったからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝としてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好い心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思つていました。厭なもの断る、断つてさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰つたのです。

ところが帰つて見ると叔父の態度が違つています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思ひ出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へ這入る積もりだと言つて、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれただけではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたのです。今でも潜んでいるでしょう。

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌を翻すように変わりました。尤もこれは私に取って始めての経験ではなかったのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言え、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。(本文)

*

*

さて、「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経つた夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしくつたからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気が色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝としてゐるのは、私に取って何よりも温かい好い心持だったのです。(これは今でも夏のお盆休みなどには帰省、《民族の大移動》などが行なわれている)。——単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思つていました。厭なもの、断つてさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平氣でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元氣で国へ帰つたのです。(だが実際は大きな問題が待っていたのである。)

ところが帰つて見ると叔父の態度が違つています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の

高等商業へ這入る積もりだと言って、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたので。今でも潜んでいよう。——私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてもいるような気分で、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。(これは死んだ両親があゝの世から自分を見守っていてくれるというような、いわば純朴かつ伝統的な「考え方」である。)

私の世界は掌を翻すように変りました。尤もこれは私に取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはっと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言えば、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりましたとある。

これらは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、この「時期」(中・高時代)というのは、まさに「第二性徴」とともに、自我がはつきりと目覚めて、異性への関心も一気に高まるだけではなく、それに加えて、自我の発達とともに、どういうことでも自分で考え、そして、自分で判断したがるような傾向が強くなり、それゆえ、今までは親や先生あるいは大人たちの言うことや考え方などに対して、それほどその真偽を深く厳密に問うことも少なく、比較的素直に受け入れることが多かったのに対して、次第に親や先生あるいは大人たちの考え方などのなかにある「矛盾や不合理」その他などに対して、はつきりと「不平や不満」などを感じるようになり、時には非常に強く「反発や反抗」などをするようになるという、いわゆる「第二反抗期」に入ることもなるわけである。そして、このことは同時に、今までのような親や大人への「強い依存」から次第に離れ始め、それに代わつて、まさに「友達との関係」などがより親密なものになつて行くという時期でもあるということである。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になつたということである。

*

*

八、家の財産のこと

八、家の財産のこと

「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称することく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往來して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉を口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだらうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実しか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾をもっているという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。

私はどうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしています。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかったのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もっと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿りつきたがっているのを、やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていてでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だったかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷やかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きていると信じています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もつと強い物にもつと強く働き掛ける事が出来るからです。(本文)

*

*

さて、「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称するごとく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往来して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉が口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しい様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。この「忙しい忙しい」と言つて真面に会おうとしない、或いは真面に話し合おうとしないのは、相手に何か「やましいこと」(つまり後ろめたいことや良心がとがめるようなこと)がある場合が殆んどではないかと思う。

私は叔父が市の方に妾をもつていてという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語つて聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。(つまり妾を持てるようなお金や一時失敗しかかつていた事業を立て直すようなお金などは、一体、どこから出ているのかという疑惑である。)

私はとうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかつたのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは今早くからそこへ辿りつきたがつているのを、やつとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていてでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だつたかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮してはおりません。私は

冷かな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きています。信じています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来るからです。

*

*

つまり、第一部で、先生という人は、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と語るのであった。それに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、「……意味と言つて、深い意味はありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くので、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言った風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と言うのであった。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつたとある。

そこで、敢えて、「……思想界の奥へ突き進んでみる」と、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「知的部分」(それは知性や理性その他など)によつて強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、それがまさに「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです」ということである。一方、何らかの問題を起こすようなその時には、その人の「知的部分」(それは知性や理性その他など)による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝つてしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということである。それでは、「……いざという間際」ということであるが、それは、多くの場合、いわば「精神的に追い詰められているような時」が多く、例えば、どうしてもお金が欲しいという時には、(悪いとは知りつつも)、目の前のお金について手を出してしまうということである。ふだんならばそんなことはしないのである。

それは、何も「お金」に限ったことではなく、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、社会的地位欲、出世欲、名誉欲、名声欲、その他、何であれ、どうしてもそれを得たいという余りにも強い欲求に襲われているような時には、嘘も裏切りもまた様々な策略も不正も、その他、もういかなる手段を尽くしてもそれを何としてでも手に入れたいとする傾向があるということである。

九、叔父に財産を胡魔化される

「……一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とも言えましょうか。私はその時の己れを顧みて、何故もっと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、

正直過ぎた自分が口惜しくって堪りません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなた知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛してはいないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思えます。胡魔化されるのはどつちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに関係のないあなたに言わたら、さぞ馬鹿氣た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着きまで長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言って忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したので、叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らってくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で畠地などを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらつた金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言うと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。(本文)

*

*

さて、「……」口で言つと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的

に言えば本當の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とでも言えましようか。私はその時の己れを顧みて、何故もつと人が悪く生れて来なかつたかと思ふと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。しかしまたどうかして、もう一度あいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思ひます。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛してはいないだけで、嫌つてはいなかつたのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思ひます。胡魔化されるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに關係のないあなたに言わせたら、さぞ馬鹿氣た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。（これは極めて大事なことであり、本来、信頼出来る「第三者」（例えば弁護士その他）などを立てて、問題の解決を図るのがベストである）。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視してました。私は叔父が私を欺むいと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ひないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙つてそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公沙汰にするか、二つの方法しかなかつたのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着ままでに長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中の中からですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言つて忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らつてくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で「畠地」などを売ろうとしたつて容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自由すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらつた金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言うと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。（これは凄いことで利子だけで生活が

出来ていたということであり、この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。

一、三度目の帰省部分の要約

まず、私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷（実は新潟県）がそれほど懐かしかったからです。生れた所は空気が色が違います、土地の匂いも格別です、父や母の記憶も濃やかに漂っています。——単純な私は、従妹との結婚問題について、さほど重大とは考えておらず、厭なものとは断る、断ってしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたので、（私はなんの心配をせず）、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいましたが、妙なものは、叔父ばかりではなく、叔母も妙であり、従妹も妙であり、そして、東京の高等商業へはいるつもり、男の子まで妙なのです。

*

*

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私が叔父の態度に心づいたのも、それは、何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今まではまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そして、このままほっておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。また、このままでは、死んだ父母に対しても済まないという気を起したのです。私は叔父が市の方に妾をもち、また、一時事業で失敗しかかっていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たという噂などを聞いたのも、私の疑惑を強くしたものの一つでした。（つまり「家の財産を女遊びや事業などに使い込んでいた」ということである）。私はどうとう叔父と談判を開きました。一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化していったのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。すべてを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。訴訟も考えましたが、時間がかかるので、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形に変えることにしたのです。（ちなみに、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「財産」をだまし取られたことになるのだろう）。此所までの推移は、次のようなものである。

二、高等学校時代のまとめ

まず、両親の死後、私は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していったのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産（畠地）」などは、市における中学の旧友がすべて「金」に換え

てくれたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にする
ことが出来たのです。そこで、騒々しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、た
またま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家の話を聞いて、そこに下宿
することになるといふ展開である。

*

*

十、新たな下宿先を見つける

十、新たな下宿先を見つける

「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言った訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいました。その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思いました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだにいい町になり切れないで、がたぴししているあの辺の家並は、その時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜いたり、横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言つて、少時首をかしげていましたが、「……かし家はちよいと……」と全く思い当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞くのです。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえって家を持つ面倒がなくて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言つて。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人に会つて来意を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということをごどこかに握つたのでしよう、いつでも引越して来て差支えないという挨拶を即坐に与えてくれました。未亡人は

正しい人でした、また判然した人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのだろうと疑いもしました。(本文)

*

*

さて、「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言つた訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。(警戒心の表れであり)、ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がまるで違つてしまいました。が、その頃は左手が砲兵工廠の土堀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立つて、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西側の趣が違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適當な宅はないだろうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切れないで、がたびししているあの辺の家並は、その時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言つて、少時首をかしげていました。が、「……かし家はちよいと……」と全く思い当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞かれました。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえつて家を持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。(人の運命を変える最初のきっかけというものは、多くの場合、ほんのちよつとしたことから始まるものである。)

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被つていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言つて。けれどもその頃の大学生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。(この頃は、まだ自分に自信を持つていて、まさに快活かつ積極的に行動をしてい

たのである。)

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の「身元やら学校やら専門」やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握ったのでしよう、いつでも引つ越して来て差支えないという挨拶を即座に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然とした人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服しましたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのかと「疑い」もしました。(これは娘の「婿選び」でもあつたのかも知れない。)

さて、奥さんという人は、先生(当時は大学生)と初めて会つた時から、この人ならばという直感がすぐに働いて、先生(当時は大学生)を即座に下宿させたということである。それは、最初から、奥さんの「お目」にかなつた、まさに「好ましい人物」に見えたということであり、それは、また、お嬢さんの「目」にも、恐らく、同じような印象で見えていたことになるのだろう。つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとそのお嬢さんとも親しくなれるとともに、そこのお嬢さんのことが好きになつていくという展開になるのです。

十一、八畳の部屋の様子

「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差しました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたのですが、それでも多少は残つていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かつてもらいました。それからその中で面白そうなものも四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言つた琴と活花を見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走に活けられたのだという事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしよう。移つた私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が

予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからああなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頹杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入つた手を弾かないところを見ると、上手なのじやなかうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾つてくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変つた例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けました。(本文)

*

*

さて、「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事です。私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。(それは、一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たという、ちゃんとした軍人未亡人の一戸建の家)」「二室」であり、それゆゑ、移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁(側)に明るい日がよく差しました。(下宿は、「二室」借りる間借りであり、例えば、三畳、四畳、六畳、八畳などがあり、アパートやマンションなどに住むのとは全く違つたのである。)私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたの

ですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言った琴と活花を見たので、急に勇気がなくなってしまうました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走（客への供応・もてなしの意）で活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしょう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。（この最初の「出会い」の時から、先生という人は、まさにお嬢さんに心惹かれてしまつたのかも知れない。それが次の本文になるかと思う。）

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりましたとある。

*

*

例えば、よく『一目惚れ』というものを経験することがあるかと思う。それは、一体、どういふものかと言えば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであつたりとめぐり逢つた相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ！」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。それは、なぜかと言えば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな！」とか、「あつ、カッコいいなあ！」というような思いに襲われて一杯になつてゐるために、しばらく「動き」を奪われてしまうものなのである。しかも、一方だけがそういう「一目惚れ」に深く陥るのではなく、二人が同時にそのような「一目惚れ」に深く陥つた時には、その瞬間、「時計が止まつた」ような感じ、相手の姿だけが「鮮明に見え」て、それ以外のまわりのものは、ほとんど薄れてしまうものなのである。しかも、お互いがそういう状態で、「相手を見つめながら、立ち止まつてゐる」状態になるということである。もちろん、それは、一瞬のことかも知れないが、その時、一種の「心から心へのテレパシー」のようなものが働いている感じにもなるものである。それは、お互いが「同じような心の波長」を出し合つていて、それが「深く響き合つてゐる」ような感じになる場合も時にはあるのだろう。先生の場合にも、そのような「一目惚れ」のような感じがあつたのかも知れない。

*

*

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、

その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入った手を弾かないところを見ると、上手なのじゃなからうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかったのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変わった例がありませんでした。(この「活方も花瓶」も変わらないのは、奥さんもお嬢さんも「活花」にはこれという特別の思い入れの「興味や関心」はなかったのかも知れない。もし何か特別の思い入れの「興味や関心」があれば、その「活方や花瓶」なども換えたりしたかも知れない。その目的は、八畳の室を活花で飾って、先生に少しでも和んでもらえればそれで好いということである)。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぼつんぼつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。(それでは、一体、誰が、「叱る」のか？ それは奥さんであり、その理由は、先生という人の「勉強の邪魔」などにならないようにという配慮からになるのだろう)。——私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けたのでした。

十二、先生の心の状態

「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になっていました。他は頼りにならないものだという観念が、その時骨の中で染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくまりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言った如くに鋭く尖ってしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつていようと思われまます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょう。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわされていようと思われませんでした。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻してました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐つていました。時々彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さえあつたのです。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ

両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかつたのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかつたのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事がありません。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくて、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だからという考えが、それで前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしょうか。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だつたかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆んど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。（本文）

*

*

さて、「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になつていました。他は頼りにならないものだ」といふ觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまつたように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言つた如くに鋭く尖つてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょうとある。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわす事が出来ませんでした。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻してゐました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐つてゐました。時々は彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたやうなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事

さえあったのです。

これは、一体、何かと問えば、それは、信じ切っていた叔父に裏切られて、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「家の財産」の多くを騙し取られてしまったことから、先生という人は、「……他は頼りにならないものだ」という觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです」とある。つまり、それが「トラウマ」となって、まさに「人間不信」へと深く陥ってしまったということである。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるというより外に仕方がないので。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したのも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。そのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人（公務員）か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくて、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だから（裕福な人が好んで素人屋などに下宿するはずがない）という考えが、それ以前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしよう。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客（例えば平の公務員）と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆ど関係のないのと同様でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体（人間性）にまで押し広げて、同じ言葉を応用しようとするのです。

十三、奥さんとお嬢さんと先生との関係

「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほぎよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れませんが。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありません。また私の方で菓子を買って来て、一人をこっちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まって、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲って、私の室の前に立つ事もありませんし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めています。傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし実際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行って、こっちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、なにと同じ事で、親子二人が往ったり来たりして、どっち付かずと占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解っていました。よく解るように振舞つて見せる痕迹さえ明らかでした。(本文)

*

*

さて、「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ち

やんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。(これは「外的事実」と「内的事実」との違いであり、他人から見れば、落ち着いているように見えても、本人の「心の中」では大変なことになっているようなことはよくあることである。)

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買つて来て、一人をこちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといつしよに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。(これはお互いに急速に親しさを増して行つたということであり、このまま先生とお嬢さんとが結婚をして、三人で「新しい生活」を始めていたら、恐らく、誰もが羨むような「幸せな夫婦(家族)」になつていたかも知れないのである。)

しかし、実際は、そうはならなかつたのである。私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありませんし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待つているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。(これは想いがより募っている「心の状態」にあるからである。)

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、ないと同じ事で、親子二人が往つたり来りして、どっち付かず占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。(これは自分の心とは違う様なことを言動し兼ねないということなの

か？）、しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかったあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解っていました。よく解るように振舞って見せる痕迹さえ明らかでした。（これはもうお嬢さんの方も先生のごが好きになつて、いるということである。）

*

*

十四、奥さんの想い

十四、奥さんの想い

「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしかったのかも知れません。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなものだったのです。」

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えます。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付てもらいたかったのです。頭の働きから言えば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからああなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どつちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として

二人を接近させたがっていただけだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。(本文)

*

*

さて、「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしくなかったのかも知れませんが、(それは自分から積極的に行動に出ないこと)。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなもの(純朴)だったのです。

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようですから、始めてこんな場合に会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付てもらいたかったです。頭の働きから言えば、それが明らかで矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられません。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな事をするかその意味が私には呑み込めなかつたのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからあなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。(この奥さんの態度は、実に当然のことであり、二人が親しくなるのはよいが、肉体関係を持つ様なことには警戒したのである。)

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかつたのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。(昔は、若い女性は処女で結婚するのが普通であり、だからこそ、母親が警戒するのも当然であり、また当時の書生気質として、その頃の私たちは大抵そんなもの《純朴》だったのである。)

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内

面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。

一、奥さんの想い

さて、奥さんの「想い」であるが、軍人の未亡人である奥さんという人は、当然のことながら、これからの「人生」をどうしたらよいかを考えていたかと思うが、その場合、軍人の未亡人であるので、奥さん自身が「再婚」するということは、当時としては、なかなか考えにくかっただろう。だとすれば、自分の「娘」(お嬢さん)が、一体、どのような男性と「結婚」するのが、まさに「最大の関心事」であったことは、容易に想像できることである。——例えば、その「相手の男性」が「長男」であれば、当然のことながら、自分の「娘」(お嬢さん)を「嫁」に出さなければならぬ。それでは、自分(奥さん)は、いわば「独り暮らし」(独りぼっち)になってしまふ。出来ることならば、「婿」を迎えて、まさに「三人で暮らせるような生活」というものを望んでいただろう。もちろん、「相手の男性」の「……家柄、家族構成、年齢、人柄、学歴、職種、才能、社会的地位、収入、その他」、それらを含めて「候補者選び」を行なうことになるだろうが、しかし、何よりも大事なことは、相手の男性がどういう性格の「男性」であり、また、自分の「娘」(お嬢さん)が「心の底から相手を好きになれるかどうか」であり、さらに大事なことは、若し、「三人で生活した場合、果たしてうまくやっていけるかどうか」ということである。そのような奥さんの「条件」にぴったりと合っていたのが、まさに「先生」(当時は大学生)という人であったということである。

十五、奥さんの態度と先生の心模様

「……私は奥さんの態度を色々総合して見て、私がこの家で充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べる女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだろうと思いました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるところとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それ

でいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思いましたが。私は嬉しかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したと言わないばかりの顔をし出しました。それから私は私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心がまた起つて来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明けた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなからうかという疑問に会つて始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思つと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なではありません。絶体絶命のような行き詰まつた心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんの態度を色々綜合して見て、私がこの家で充分信用されてい

る事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思つました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなからうかと思つました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのです

から（それが恋心であり、心から好きになると、誰が何と言おうと相手を信じたくなるのである）。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件（叔父の件）については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえずで一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。——奥さんは、「……何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわんばかりの顔をしました。それからは私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいでした」とある。

これらは、いったい何を意味するのかと問えば、それは、軍人の未亡人の奥さんにしてみれば、いわゆる「先生」（當時は大学生）を自分の「娘」（お嬢さん）の「花婿」として迎えて、まさに「三人で暮らす」には最適な「家庭状況」だったということである。——逆に、例えば、両親が健在で、先生が「長男」（一人息子）であれば、当然のことながら、自分の「娘」（お嬢さん）は、どうしても「花嫁」として嫁がせなければならぬことになる。そうなれば、軍人の未亡人の奥さんという人は、まさに「独り暮らし」（つまり独りぼっち）になってしまうのである。

ところが、そのうちに私の猜疑心（疑う心）がまた起つて来ました。私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういふ拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家（お金目当て）として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。——奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をすのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と「特殊の關係」を付けるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家（お金目当て）ではなからうかという疑問に会つて初めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思つくと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも眞実であつたのです。

十六、茶の間かお嬢さんの室で男の声がすると……

「……私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽ってでもいるかのように、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却って仕合として喜びました。それでも時々は気が済まなかったのでしょうか、発作的に焦燥ぎ廻って彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんでしたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼をするほどの男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却って食客の位地にいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出した序でに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所にどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮を与えるのです。私は坐っていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯の知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるので。坐っていてそんな事の知れよう筈がありません。そうかと言って、起って行って障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切っている物欲しそうな顔付とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑の意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付を失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなかるうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。私は自由な身体でした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或はこの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎に私は躊躇して、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までは方角の違った場所に立って、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば

出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。(本文)

*

*

さて、「……私は相変わらず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。(それは外のことに気を取られてゐるからである)。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽つてもゐるかのよう、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却つて仕合として喜びました。それでも時々気が済まなかつたのでしよう、発作的に焦燥ぎ廻つて彼らを驚かした事もあります。(これはお嬢さんのことばかりを考えていたということである。)

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありましたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだからならないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮(気遣い)からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼ねをするほどな男は一人もなかつたのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事です。(つまり、お嬢さんが友達と小さな声でしゃべるのは、何も自的にそうしているのではなく、母親から先生の「勉強の邪魔」にならないようにと言われているのであり、だからこそ、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事になるのです。)

しかしこれはただ思い出した序でに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所にどうでもよくない事が一つあつたのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮を与えるのです。私は坐つていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯の知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。坐つていてそんな事の知れよう筈がありません。そうかと言つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切つてゐる物欲しそうな顔付とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑の意味でなくつて、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付を失つてしまふのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなからうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。(これがまさに恋に深く陥つてゐる時の「嫉妬心」というものであり、誰もが経験するこ

となるが、例えば、恋する女が外の男と親しげに話をしている姿などを見ると、自分でも自分がコントロール出来ないほどの凄まじいまでの嫉妬心に襲われてしまうものであり、それは女性の場合でも全く同じことになるのである。

私は自由な身体でした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或はこの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎に私は躊躇して、口へはどうとう出さずにしまつたのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです。(この「……他の手に乗るのは何よりも業腹《厭》であつた。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです、この一つの「トラウマ」が、先生の正常の判断を先生の人生を狂わせることになるのです。)

十七、三人で着物を買ひに出る

「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。私は實際田舎で織つた木綿ものしかもつていなかったのです。その頃の学生は絹の入つた着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出所に暮しているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしがつて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思つたのでしよう、評判の胴着をぐるぐる丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立つて笑いながら友達の所作を眺めていました。私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでした。その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えろという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだといふ変な考えをもつていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言うのです。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしょに歩き廻る習慣をもつていなかったもの

です。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切
って出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗ったものだか
らなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものは
きつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行って買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思
ったより暇がかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするの
です。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ豎に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てく
れると言います。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく
一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛って帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何
かご馳走すると言って、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁
も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さん
の知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠
っていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲
われました。何時妻を迎えたのかと言ってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君
は非常に美人だと言って賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男
に何処かで見られたものと見えます。(本文)

* * *

さて、「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。
私は実際田舎で織った木綿ものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹の入った
着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出に暮し
ているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。す
ると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしくて色々弁解しましたが、折角の
胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄ってたかって、わざ
と着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思っ
たのでしよう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝
の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立って笑いな
がら友達の所作を眺めていましたが、私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませ
んでしたとある。

まず、明治時代、大学生《書生》の姿は、例えば、三四郎の袴姿などが一般的だつた
かと思うが、そこに「羽二重の胴着」となれば、それは、いわば「高級なもの」になり、
それゆえ、みんながそれを見て笑い出し、また、大勢が寄ってたかって、面白がって、わ
ざと着せたりしたとある。一方、女性の場合、袴姿は、明治四年頃から女学塾長や教授
などが用い、十一年には女学校の「女学生」たちが「紫の袴」をつけ、三十三年頃から
は「行灯袴」という中仕切りのないスカートのような袴（女袴）が誕生して、それが
やがて制服となり、華族女学校などでは「海老茶色」を用いたとある。そして、女学校に
通っていたこの作品のお嬢さんなども、まさに髪にリボンを付けた「典型的な袴姿」（女
学生スタイル）をしていたのである。ちなみに、近世（主に江戸時代の）の武士たちは、

「馬乗り袴」(中が二股に分かれている袴)をつけて、それは馬に乗りやすいようになつていたそうであるが、今日の「男袴」では、「馬乗り袴」と「行灯袴」の両方があり、例えば、茶道、弓道、剣道、書道、生け花、冠婚葬祭、芸能、その他、それぞれの用途に依じて、使い分けているということである。

その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えるという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだといふ変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。その上私は色々世話になるといふ口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいっしょに來いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言ふのです。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などいっしょに歩き廻る習慣をもつていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切つて出掛けました。(奥さんは、いったい何を考へているのだろうか？ それは先生とお嬢さんとの關係を「より強く結びつけ」ようとしていたのである。)

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行つて買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思つたより暇がかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をします。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ堅に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てくれると言ふのです。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。(例えば、お嬢さんが自分の気に入つたものをただ買うのではなく、先生見立ての、先生が好む、これが好む、これがお嬢さんに一番似合うというものを選んで買うことにより、お嬢さんは、先生お気に入り、反物を手に入れ、それをやがて着物として着ることになり、お嬢さんにとっては一生の宝物《想い出》になるのである。)

こんな事で時間が掛つて帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何かご馳走すると言つて、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。(これは、通りががりの店ではなく、奥さんの行きつけの店であり、しかも、奥さんのお気に入り、の店でもあるのだらう。)

我々は夜に入つて家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠つていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎へたのかと言つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

まず、今と違つた、空気のの中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻る習慣をもっていなかったものです。そういう中で、お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちました。往來の人がじろじろ見て行くのです。(これは余程の美人であり)、そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでしたとある。それは、この「美人」の相手がこの「男性」なのかという感じで見ているのである。そして、月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つばらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎えたのかと言つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

さて、此所までは、まさに「理想的な展開」であり、それゆえ、このまま二人が結婚していたら、恐らく、この上もない「幸せな夫婦」になれたかも知れない。しかし、それは、「小説」にはならないのです。「小説」になるためには、何らかの「問題」が生じなければならぬ、それがこれからの内容になつていくのである。

十八、奥さんとお嬢さんの気持ち

「……私は宅へ帰つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと言つて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考へている通りを直截に打ち明けてしまえば好かつたかも知れませんが。しかし私にはもう狐疑という薩張しない塊がこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留まりました。そうして話の角度を故意に少し外らしました。

私は肝心の自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いていらっしゃるらしく見えました。極めようと思へばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外に子供がないのも、容易に手離したがる原因になつていました。嫁にやるか、贅を取るか、それにさえ迷つていゝるのではなからうかと思はれるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸したと同様の結果に陥つてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事が出来ませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へ帰ろうとしました。

さつきまで傍にいて、あんまりだわとか何とか言つて笑つたお嬢さんは、何時の間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考へているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前

にして坐すわっていました。その戸棚しやくの一尺ばかり開あいている隙間すきまから、お嬢ぢやうさんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間すきまの端はじに、一昨日おととい買った反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢ぢやうさんのものと同じ戸棚とだなの隅すみに重ねてあったのです。

私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥おくさんは急に改かまった調子てうしになつて、私にどう思しうかと聞くのです。その聞き方は何をどう思しうのかと反問はんもんしなければ解わからないほど不意ふいでした。それがお嬢ぢやうさんを早く片付けた方が得策とくさくだろうかという意味だと判然はつきりした時、私はなるべく緩ゆるくならな方が言いだろうと答えました。奥おくさんは自分もそう思しうと言いいました。

奥おくさんとお嬢ぢやうさんと私の関係かんけいがこうなつてゐる所へ、もう一人男おとこが入いり込まなければならぬ事ことになりました。その男おとこがこの家庭かていの一員いちゐんとなつた結果けつこは、私の運命うんめいに非常ひじょうな変化へんげを来きたしています。もしその男おとこが私の生活せいかつの行路こうろを横切よこぎらなかつたならば、恐おそらくこういう長いものをあなたに書き残のこす必要ひつやうも起おこらなかつたでしょう。私は手もなく、魔まの通とほる前に立たつて、その瞬間しゆんげんの影かげに一生いしやうを薄暗うすくされて気が付きかずいたのと同じ事ことです。自白じはくすると、私は自分でその男おとこを宅うちへ引張ひくつて来たのです。無論もちろん奥おくさんの許諾きょだくも必要ひつやうです。私は最初さいしゆ何もかも隠かくさず打ち明あけて、奥おくさんに頼たのんだのです。ところが奥おくさんは止よせと言いいました。私には連れて来こなければ済すままない事情しやうけいが充分ちゆうぶんあるのに、止よせと言いう奥おくさんの方かたには、筋すぢの立たつた理屈りくつはまるでなかつたのです。だから私は私の善よいと思しうところを強しいて断行だんぎやうしてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……私は宅うちへ歸かへつて奥おくさんとお嬢ぢやうさんにその話をしました。奥おくさんは笑わらいました。しかし定さだめて迷惑めいわくだろうと言いつて私の顔かほを見ました。私はその時腹はらのなかで、男おとこはこんな風ふうにして、女めづから氣きを引ひいて見られるのかと思しいました。奥おくさんの眼まなこは充分ちゆうぶん私わたしにそう思しわせるだけの意味いみをもつていたのです。私はその時自分の考かんがへてゐる通とほりを直截ちやくせつに打ち明あけてしまえば好よかつたかも知しれませんが、(むろんその通とほりであるが)、しかし私わたしにはもう狐疑こぎ(疑ぎつてためらう)という薩張さつぱりしない塊かたまりがこびり付ついていました。私は打ち明あけようとして、ひよいと留とどまりました。そうして話わの角かく度を故意こぎに少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分じぶんというものを問題もんだいの中から引き抜ひいてしまいました。そうしてお嬢ぢやうさんの結婚けっこんについて、奥おくさんの意中いぢゆうを探たづなつたのです。奥おくさんは二、三さんという話わのないでもないような事を、明らかに私わたしに告つげました。しかしまだ学校がくへ出でてゐるくらいで年としが若いから、こちらではさほど急いそがないのだと説明せつめいしました。奥おくさんは口くちへは出でさないけれども、お嬢ぢやうさんの容色ようしきに大分だいぶ重おもきを置いてゐるらしく見みえました。極きめようと思しえばいつでも極きめられるんだからというような事ことさえ口外くちがいしました。それからお嬢ぢやうさんより外ほかに子供こどもがないのも、容易ゆいに手離てりしたがない源因げんいんになつていました。嫁よめにやるか、簪むぎを取るか、それにさえ迷まよつてゐるのではなからうかと思しわれるところもありました。(これは先生せんせいが氣付きかないだけで、奥おくさんは「三人さんにんで暮くらす」ことをすすでに考かんがへていたのである。)

話わしてゐるうちに、私は色々の知識ちしきを奥おくさんから得えたような氣きがしました。しかしそれがために、私は機会きかいを逸いつたと同様の結果けつこに陥おちつてしまいました。私は自分じぶんについて、ついに一言いちごんも口くちを開ひらく事ことが出来できませんでした。私は好いい加減かげんなところで話を切きり上げて、自分の室むろへ歸かへろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何なにとか言いつて笑わらつたお嬢ぢやうさんは、何時いつの間まにか

向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐つていました。その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物もお嬢さんのものと同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。(お嬢さんは、先生と結婚することを「心の中」ではすでに強く望んでいたのです。それを知っている奥さんは、次のような問いかけを敢えて先生にするのです。)

それは、私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、「私にどう思うか」と聞くのです。(これはむしろお嬢さんのことをどう思うかと聞いているのであるが)、その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然した時、私はなるべく緩くいな方が言いだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うと言いました。(しかし、この場面は、(先生と)娘の結婚は早い方がよいか遅い方がよいかと訊いているのであり、しかも、奥さんがぜひとも聞きたかつたのは、先生の「本心」であり、娘のことをどう思っているのか、もし好きならば、結婚してもよいと思つているのかどうか、そこがぜひとも知りたかつたのであるが、それを直接(露骨に)聞くことはさすがに避けたということである。)

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなつていゝる所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来しています。もしその男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅へ引張つて来たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止せと言いました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。(ここで最も大事な言葉は、「止せ」という奥さんの言葉であり、もし「その通りに止して」いたら、何の問題も起こらずに済んだのである。しかし、それではむしろ「小説」にはならない。それゆえ、「小説」になるためには、どうしても何らかの「問題」が生じる必要があり、それがこれからの作品(内容)の新たな展開部分になるのである。

*

*

十九、Kという親友の登場

十九、Kという親友の登場

「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者の方へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が良かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るものではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の方へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言っていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこうとする意氣組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覺悟がない

にしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。(本文)

*

*

さて、「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷(新潟)の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありませんが、次男でした。それである医者(先生)の所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が好かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になったとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分かりません。とにかくKは医者(先生)の家へ養子に行ったのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。(この時は高校時代で)、その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言っていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこうとする意気組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられません。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の

事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。

*

*

さて、先生とKという人は、高校時代は、同じ下宿屋の六畳に一緒に暮らしていたらしく、その後、その下宿を離れて、先生（当時は大学生）という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとお嬢さんとも親しくなれたとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたわけである。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として、医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかつたので、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになるのである。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配していたことだろうと思うが、（それが「止せ」という言葉であるが）、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」（内容）になっていくのである。

二十、Kの三年間（高校）の夏休みの過ごし方

「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になっているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかつたのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当たり前だろうとも言いました。

その上彼は機会があったら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰っても専門の事は何にも言わなかったものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰って何をするのだというのです。彼はまた踏み留まって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入ってまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(本文)

*

*

さて、「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたつて構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平気でした」とある。(先ず、高校であるので、恐らく、普通科になるかと思う。ここで最も大事なことは、普通科であれば、養父母に知られる心配はない。ただ、Kという人は、この高校の時から、養父母が希望する「大学の医学部」へは行かないと決めていて、自分の好きな道(学業)へと歩き出したのである。)

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つつと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしよう。

詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。(本来、数珠はお経を読んだ回数数を数える道具であるが、Kという人が一体何を数えていたかは誰にも解りようがない。むしろ手に数珠を持つてることが何か安心や手慰めになつていたのかも知れない。)

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかったのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当り前だろうとも言いました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大なる興味をもっているようでした。(これは、Kという人は、宗教や哲学などへの向上心がより強かつたということになるのだろう。)

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にも言わなかつたものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかつたのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです。校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかつたと言つたのです。(これは、今日でも、世間は一般に学生の生活や学校の規則の詳細などについては、驚くほど無知であることが多いのだろう。)

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をするのだというのです。彼はまた踏み留まつて勉強するつもりらしかつたのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入つてまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に、変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのださうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入つて、までも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(これは、大学の入学の時に、医学部かそうでないかはすぐ分かつてしまふものであり、だからこそ、その前に、養父母へ手紙を出しているのである。そして、最悪の場合、養子縁組が破綻した場合でも、「自力」で(何か仕事をして)学費を稼いで、でも、大学へは行く覚悟でいたということである。)

二十一、Kの養子縁組の破綻

「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kは

またそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど拵底でもなかったのです。私はKがそれで充分やってみるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱いでいる訳に行きません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達達の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいどうか出来なければ男でないような事を言いました。私は私の責任を完うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとつて、この仕事かどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいました。したが、解決のますます困難になつて行く事だけは承知して行きました。人が仲に入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だと言って、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないと言いましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。

最後にKはどうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉で言えば、まあ勘当なのでしょう。或はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父は言うまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士に似たところがありませんかと疑われます。(本文)

*

*

さて、「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こっちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復讐してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしななければならぬのは、月々に必要な学資でした」とある。(差し当り必要なものは、月々に必要な学資と生活費になるのである。)

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底(全く無い)でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱いている訳に行きません。私はその場で物質的の補助(お金の援助)をすぐ申し出しました。するとKは二も三もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達達の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいいいか出来なければ男でないような事を言っていました。私は私の責任を完うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。(つまり、Kという人は、高校さえ卒業出来れば、あとの大学は自力で何とかなると考えていたのである。だからこそ、彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいいいか出来なければ男でないような事を言っているのである。)

そして、Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとつて、この仕事がどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛氣な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいました。したが、解決のますます困難になつて行く事だけは承知していました。人が仲に入つて調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だと言って、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないと言いましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。(これは、先生の勝手な思い入れであり、この勝手な思い入れが、Kという人を何が何でも自分の下宿先へと引き入れてしまい、その結果、いわば三角関係が生じて、深く悩み苦しむことにもなるのである。)

最後にKはどうとう復讐に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろという

のです。昔の言葉で言えば、まあ勘当(かんとう)なのでしょう。或(ある)はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母(けいぼ)に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或(ある)は彼と実家との関係に、こうまで隔(へだ)りが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父は言うまでもなく僧侶(そうりよ)でした。けれども義理堅(ぎりけん)い点(てん)において、むしろ武士(さむらい)に似たところがありはしないかと疑(うた)われます。

さて、ここで最も大事な言葉は、「……Kは母のない男でした。彼の性格(せいかく)の一面は、たしかに継母(けいぼ)に育てられた結果(けいこ)とも見る事が出来るようです。もし彼の実(ま)の母(はは)が生きていたら、或(ある)は彼(かれ)と実家(まじか)との関係(けんけい)に、こうまで隔(へだ)りが出来(で)ずに済(す)んだかも知れ(し)ないと私(わたし)は思(おも)うのです」とあり、Kという人の実(ま)の母(はは)親(おや)は、すでに死(し)んでいて、二番目(にばんめ)の母(はは)親(おや)(継母(けいぼ))との仲(な)は、(恐(おそ)らく)あまりよくなかったからこそ、養子(やしん)に出(い)されたとも言(い)えるのである。というのも、Kという人の実家(まじか)(お寺(おてら))では、生活(せいかつ)には全く困(こ)っていなかつたからである。むしろ「継母(けいぼ)」との確執(たつしやく)(不仲(ふなな)から、Kという人は、養子(やしん)に出(い)されたとも言(い)えるのである、実(ま)の父(ちち)親(おや)は、実(ま)の息子(いきし)(K)より「継母(けいぼ)」の方(かた)を選(えら)んだというこゝで、Kという人は、自分(おれ)は実(ま)の父(ちち)親(おや)に捨(す)てられたという意識(いしき)を持(も)つていたかも知れ(し)ないのである。だからこそ、自力(じりき)で生(い)きるという意識(いしき)が非常(ひじょう)に強(つよ)くなつたのかも知れ(し)ない。この問題(もんだい)は、あとで改めて考(かん)えてみたいと思(おも)う。

二十二、先生(せんせい)の下宿先(げしゆくせん)に同居(どうきゅう)するまでの経緯(けいゐ)

「……Kの事件(じけん)が一段落(いちだんらく)ついた後(あと)で、私は彼の姉(あね)の夫(おとこ)から長い封書(ふうしよ)を受け取りました。Kの養子(やしん)に行(い)つた先(せん)は、この人の親類(けんるい)に当(あた)るので、彼(かれ)を周旋(しゆせん)した時(とき)にも、彼(かれ)を復籍(ふくせき)させた時(とき)にも、この人の意見(いけん)が重(おも)きをなしていたのだと、Kは私(わたし)に話(わ)して聞(き)かせました。

手紙(てがみ)にはその後(K)がどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉(あね)が心配(しんぱい)しているから、なるべく早く返事(へんじ)を貰(もら)いたいという依頼(いらい)も付け加(く)えてありました。Kは寺(てら)を嗣(つ)いだ兄(あに)よりも、他家(たけ)へ縁(ゆかり)づいたこの姉(あね)を好(す)っていました。彼(かれ)らはみんな一つ腹(はら)から生(い)れた姉弟(あねいもうと)ですけれども、この姉(あね)とKとの間(ま)には大分(だいぶ)年齒(ねんぢ)の差(さ)があつたのです。それでKの小供(こども)の時分(とき)には、継母(けいぼ)よりもこの姉(あね)の方が、却(かえ)つて本当(ほんとう)の母(はは)らしく見(み)えたのでしよう。

私はKに手紙(てがみ)を見(み)せました。Kは何(なに)とも言(い)いませんでしたけれども、自分の所(ところ)へこの姉(あね)から同じ(おな)じような意味(いみ)の書状(しよじょう)が二、三度(さんど)来(き)たという事(こと)を打ち明(あ)けました。Kはその度(たび)に心配(しんぱい)するに及(およ)ばないと答(こた)えてやつたのださうです。運悪(うんあく)くこの姉(あね)は生活(せいかつ)に余裕(あまゆ)のない家(うち)に片付(かたづけ)いたために、いくらKに同情(どうじやう)があつても、物質(ぶつしつ)的に弟(あに)をどうしてやる訳(わけ)にも行(い)かなかつたのです。

私はKと同じ(おな)じような返事(へんじ)を彼の義兄(ぎけい)宛(あて)で出(で)しました。その中(うち)に、万一(いちばん)の場合(ばあひ)には私(わたし)がどうでもするから、安心(あんしん)するよにという意味(いみ)を強(つよ)い言葉(ことば)で書き現(あらわ)しました。これは固(こ)より私(わたし)の一存(いちぞん)でした。Kの行先(ゆくさき)を心配(しんぱい)するこの姉(あね)に安心(あんしん)を与(たま)えようという好意(こうい)は無(む)論(ろん)含(こ)まれていましたが、私(わたし)を軽蔑(けいべつ)したとより外(ほか)に取りよ(よ)うのない彼の实家(まじか)や養家(やしんか)に對(たい)する意地(いぢ)もあつたのです。

Kの復籍(ふくせき)したのは一年生(いちねんせい)の時(とき)でした。それから二年生(にねんせい)の中頃(なかごろ)になるまで、約(およ)一年半(いちねんぱん)の間(ま)、彼は独力(どりき)で己(おの)れを支(さ)えて行(い)つたのです。ところがこの過度(かど)の勞力(らうりき)が次第(しだい)に彼の健康(けんこう)と精神(せいしん)

の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅の問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立つているような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして自分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際言い出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言うのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだったとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。(本文)

*

*

さて、「……Kの事件が一段落ついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。(つまり、Kという人が養子に出された医師の家というのは、実は、Kという人の姉が嫁いだ相手(その夫)の親戚先でもあつたということである。)

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう。(この「……継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう」という、この言葉こそは、まさに「継母」との「確執」(不仲)を裏付ける言葉にもなるのである。)

私はKに手紙を見せました。Kは何とも言いませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはその度に心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつた

のです。(つまり、Kの姉は、Kへの金銭的援助をしたくても出来ない生活状況にあった。それでは、なぜここに敢えてKの姉が出て来るのかと問えば、それは、素朴な疑問として、先生が好んでKの面倒などを見なくても、外に誰か兄弟か親戚の人の中でKの金銭的面倒を見られる人もいたのではないかという、その様な疑問を払拭するためのものである。) 私はKと同じような返事を彼の義兄宛で出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固より私の一存でした。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽蔑したとより外に取りようのない彼の実家や養家に対する意地もあつたのです。(この章で書かれている一連のことが、結局、先生がどうしてもKの面倒を見るしかなかったという大きな理由付けになつていたのである。)

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅い問題も手伝つていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立つていような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして当分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞かまいと、かねて予期していたのですが、実際言い出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言ふのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹つて位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだつたとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかつたのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと發議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

さて、ここで気になる文章は、「……Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えていた」とある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。――まず、高校三年間は、二人は、同じ下宿屋の六畳で一緒に生活をしていた。ところが、大学に入ると、先生という人は、未亡人の奥さんとお嬢さんそれに一人の下女のいる下宿屋へと移ることに

なり、やがてお嬢さんのことが好きになっていく。この期間、（先生一人の下宿は）、大学一年から大学二年半までの間であり、一方、Kは、先生と離れ、独力で己れを^{おの}支えていたとある。ところが、例の「養子縁組み破綻」と「実家との不和（勘当）」同然の状態となり、その結果として、先生とKという人は、大学二年の中頃（恐らく一、二月頃）から一緒に住み始めるようになり、その年の「夏休み」（二年生の終わり）は、二人で房州の方へ旅をし、帰って来ると、いよいよ九月から「新学期」（大学三年生）が始まり、二人とも学業に励むことになる。翌年の正月には、歌留多遊びなどをしたりするが、すでにKという人もお嬢さんのことが好きになっていて、先生とお嬢さんそれにKとの「三角関係」もより深まって行くという展開であるが、ただ、お嬢さんは、Kが自分に好意を寄せているという事は、全く全然知らないという展開になるのである。

*

*

二十三、Kが四疊の室に移り住む

二十三、Kが四畳の室に移り住む

「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もともと最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言つて、自分でそつちのほうを択んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言つたのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言つと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実を言つと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろふと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くこととますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであつたか、面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむつちりした様子をしてゐるにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言つただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までの所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷から喬木に移つた趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から來てゐるのですが、一つは彼の主張からも出てゐるのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のよゝうに考へてゐました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば靈の光輝が増すよゝうに感ずる場合さえあつたのかも知れませんが。

私はなるべく彼に逆らわない方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。(本文)

*

*

さて、「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったので、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言って、自分でそつちのほうを扱んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったので、下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言うのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言うと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので、私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。(この苦笑は、奥さんにしてみれば、なぜ「……私の気持ちに分らないのか?」という苦笑なのである。)

つまり、奥さんの「想い」は、ただ一つ、先生という人が大学を無事に卒業して何らかの職業に就いた頃合いを見て、先生とお嬢さんとがめでたく結婚をして、この家で三人で暮らすことを夢見てゐるのである。そこに何でわけの分からない他人などを入れて問題を起す必要があるのか? 奥さんが強く反対するのはあたり前のことであり、そこ(つまりなぜそこまで反対するのか?)に気付かない先生の方が余程おかしいのである。

実を言うと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くとますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたいか面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。(例えば、「善かれ」と思つて行なつたことが、逆に、「悲惨な結果」になるのを、一般に「悲劇」と呼ぶのである。先生の場合も、「善かれ」と思つて行なつたことが、結果として、自分(或いはK)への「悲劇」となつてしまうのである。)

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変

らずむつちりした様子をしているにもかかわらず（です）。

私がKに向って新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言っただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移った彼は、幽谷から喬木に移った趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のように考えていました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややとすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。

私はなるべく彼に逆らわない方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。（これは、奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れれば、自然と「心の中」の氷も溶けて、やがて「人間らしい心」を取り戻すだろうと考えたということであり、これは、これでもっともなことであるが、ただ、その結果、この時、先生には全く想像すら出来なかつたことが、やがてKという人の「心の中」に生じて来てしまうのである。それを誰よりも「恐れていた」のが、まさに「奥さん」だったのである。）

二十四、Kの性格と特徴

「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際して来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずつと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理を弁えていると信じていました。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体的なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしょうが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておくと医者は言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思ひます。次第に刺戟を増すに従つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじ

り弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思つていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひ其所を明らかにしてやりたかつたのです。しかし言えばきつと反抗されるに極つていました。また昔の人の例などを、引合に持つて来るに違いないと思ひました。そうなれば私だつて、その人達とKと違つている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知つた私はついに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹つていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、自分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。(それは奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れば、やがてKも「人間らしい心」を取り戻すだろうということである)。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際つて来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入つてから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらひはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずっと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理(物事の道理)を弁えていると信じていました。(つまりKは頭が良いが世間のことはまだよく知らないのです)。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしようが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に陰悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食つ

ていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておけと医者と言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思えます。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思つていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切つていたらしいのです。(つまり、肉体であれ精神であれ、その他、何であれ、それを鍛えるのに、無茶な「鍛え方」をすれば、かえつて心身を壊すことにもなり兼ねない。だからこそ、理に叶つた「鍛え方」をしなければならぬのです。)

私はKを説く時に、ぜひ其所を明らかにしてやりたかつたのです。しかし言えばきつと反抗されるに極つていました。また昔の人の例などを、引合に持つて来るに違いないと思ひました。そうなれば私だつて、その人達とKと違つている点を明白に述べなければならなくなりません。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつゝ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知つた私はいかに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹つていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたと、彼は必ず激するに違ひないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。

例えば、先生という人は、親戚との關係をすべて絶つてゐる。一方、Kという人も養家や実家との關係をすべて絶つてゐる。そういう意味では、二人ともこれという頼る所の全く無い、まさに「孤独の身」であつたのである。だからこそ、「……一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした」となるのである。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五、Kの心が段々打ち解けて来る

「……私は蔭へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだからと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取りつき把の無い人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞く

と、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕つておかなければ済まなくなります。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないと言われるのも無理はないと思ひました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に應じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に耐へていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新らしくしようと思ひました。

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言いました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われまふ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言ひました。彼は尤もだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜び（心からの喜び）を感じずにはいられたかったです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。（本文）

*

*

さて、「……私は陰へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか私には思われなかつたのです。

奥さんは「取りつき把のない」（取り付く島もない）人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと

尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕うておかなければ済まなくなりませう。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは「取りつき把がない」（取り付く島もない）と言われるのも無理はないと思ひました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合つた所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に應じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に働いていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遥かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新らしくしようと思ひました。（もちろん、先生のこの「努力」は、決して間違ひではなかつたが、ただ、その結果として、まさかKという人の「心の中」にお嬢さんへの想ひが生じて来るとは、恐らく、先生も全く夢にも想像すらできなかつたに違ひない。）

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しづつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言ひました。Kははじめ女からも、私同様の「知識と学問」を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ「軽蔑の念」を生じたものと思われませう。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言ひました。彼は尤もだと答へました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになつたのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでせう。

今まで「書物」で城壁を築いてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見てゐるのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的（Kが「人間らしい心」を取り戻す）ことをやり出したのですから、自分の成功に伴う喜悅（心からの喜び）を感じずにはゐられなかつたのです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も「満足の様子」でした。（此所までは、先生の「思惑」《思い通り》に物事が進み、まさに「喜悅」《心からの喜び》を感じてゐる状態であるが、勿論、やがて先生の「思惑」《思い通り》に物事が進まない事態が起き

て来るのである。)

二十六、Kとお嬢さんだけの状況

「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたが、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしています。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰ったのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずっと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのです。どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介になつていて私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已みました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごころでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐っていました。Kは例の通り今帰つたかと言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残つているのは、Kとお嬢さんだけだったので。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかったのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つています。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になつていたのです。Kが新しく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造つた足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどこの宅でも使っているようですが、

その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆んどなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かれました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。(本文)

*

*

さて、「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけです、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしてみました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰つたのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。(この家の「見取り図」は、次にはつきりと明記されている。)

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずつと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのですから、どこで誰の声をしたくらいは、久しく厄介になつてゐる私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已まりました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごこんでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐つていました。Kは例の通り「今帰つたか」と言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいとその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんとはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。(ふと一抹の疑問と不安が生じたのである。)

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残つてゐるのは、Kとお嬢さんだけだったので。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんとお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかつたのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つてゐるのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。(例えば、夏目漱石という人は、有名な「神経衰弱」持ちでしたので、或いは「女性の笑い声」が気に障ることもあつたのかも知れない)。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、

食事のたびに下女が膳（一人用の四角いお膳）を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になっていたので。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造った足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどの宅でも使っているようですが、（例えば、太宰治も幼少の頃、食事の時は、全員が「一人用の四角いお膳」で食べていたという記述がある）。これは、その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆どなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。（ちなみに、チャボ台は、一般に方形か円形をしていて、折り畳み式も多く、一八八七年《明治二〇年》頃から使用されるようになり、一九二〇年代後半《つまり大正末から昭和初期》に全国的な普及を見たのである。）

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。

このお嬢さんの「笑い」は、先生は「二人の関係」を何か「気にしている」（或いは「疑っている」と思つて、それを笑つているのであるが、むろん、お嬢さんにはそんな気は全くないのであり、だからこそ、笑えるのである。）

二十七、二度目のKとお嬢さんだけの状況

「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしょに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言うと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛けてみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼っている頃でしたから、普通の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んで

くれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つているお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言ふのです。宅で書物を読んだ方が自分の勝手だと言ふのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよかろうと言ふのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て居るのが、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違ひないのです。果しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしよに房州へ行く事になりました。(本文)

*

*

さて、「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしよに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時なぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けてるのが付いただけでした。(お嬢さんは、先生が「二人の関係」を何か「気にしている」《或いは「疑つている」》ような様子を見て、むしろ面白がる《可笑しがる》一面もあつたのかも知れない。)

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言つと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛てみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払つていように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼つていゝ頃でしたから、普通

の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうかだとかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ませました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでない、という昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つてのお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたので、このKに対する「嫉妬や疑念」がこれからずっと先生を苦しめることになるのである。）

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったので。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言つたのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だと言つたのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうと言つたのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。（これは当然、Kとお嬢さんとが親しくなるのを、何よりも怖れているのである）。果しのつかない二人の議論を見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういっしょに房州へ行く事になりました。

*

*

二十八、房州ぼうしゅうへの夏休みの旅

「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳こぶしのような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐すわって、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐すわって、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙もくっている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽ふけっているのか、景色に見惚みとれているのか、もしくは好きな想像を描えがいているのか、全く解わからなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答こたえるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐すわっているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐すわっているのではないかしらと忽然疑ごっせんい出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭いやになります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴どなります。纏まとまった詩だの歌だのを面白そうに吟ぎんずるような手緩てぬるい事は出来ないのです。ただ野蛮人の如ごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えりくび頭うしろを後うしろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言いってKに聞きました。Kは動きませんでしたが。後向うしろむきのまま、ちようど好いいい、やってくれと答こたえました。私はすぐ首筋を抑おさえた手を放はなしました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏かびんになって来ていたのです。私は自分より落ち付おちついているKを見て、羨うらやましがりました。また憎にくらしがりました。彼はどうしても私に取り合あう気色を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映うつりました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかつたのです。私の疑うたがいはもう一歩前へ出て、その性質を明らかにめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明こうみやうを再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私は却かえって世話のし甲斐ががあつたのを嬉うれしく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振すがりに全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍にぶい人なのです。私には最初か

らKなら大丈夫という安心があったので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。(本文)

*

*

さて、「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳のような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。(一般に、海水浴に適した場所は、波が静かで遠浅の砂浜がきれいな所かと思う。)

私はすぐ厭になりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐って、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。(夏目漱石という人は、実際、房州(千葉県南部)の方へ旅行に行った経験があり、その時に見たり聞いたり経験したりしたことなどを思い出しながら、この場面を書いているのかも知れない。)

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽っているのか、景色に見惚れているのか、もしくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしてないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじつとして坐っているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事は出来ないのです。ただ野蛮人の如くにわめくのです。

例えば、ムンクに有名な「叫び」という絵画があるが、それは、思い出したくもないこと(例えばおぞましい過去の経験や記憶)などが突然思い出されて来た時、また、考えたくもないことを突然考え始めた時、(例えば、自分はこの病気で若しかしたら死ぬかも知れないという、そのようなぞつとするような思いに襲われた時)、人間は、突然、「わあー」と野蛮人の如くにわめいて、それを意識から消し去ろうとするのである。

ある時、私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言ってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向のまま、ちようど好い、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。(この「……ちようど好い、やってくれ」という言葉は、Kという人の「心の最も奥深い処」には、もしかしたら「自殺願望」のようなものが眠っていたのかも知れない。むろん、これだけでは何とも断定は出来ない。……)

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていらしいのです。それと反比例に、私の方

は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかったのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明らかにいたしました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私の利害に何の衝突の起る訳はないのです。(それなら親友のままでもいられる)。私は却つて世話のし甲斐があつたのを嬉しく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとするれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。(それでは、なぜ「：私は決して彼を許す事が出来なくなるのか?」、それは今までの「親友」からお嬢さんめぐつての「恋敵」《敵同士》となつてしまふからである。そして、先生としては、(心から愛する)お嬢さんをKに奪われることだけは、何が何でも断固として阻止しなければならぬからである)。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。

さて、先生は、奥さんやお嬢さんになるべくKと話をするように頼みました。そして、その奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れて、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」を取り戻してやろうと試みたわけである。その結果、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」が少しずつ戻ってきて、それ自体は、むしろ世話のし甲斐があつたと嬉しく思う位なものであるが、ただ、先生が夢にも想像すらできなかつたことは、まさかKという人の「心の中」に何と「お嬢さんへの恋心」が生じてしまつたかも知れないという疑念であり、その「疑念や嫉妬心」などで先生は深く悩み苦しむことになるのである。

二十九、Kと自分を比較対照して見ると

「……私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まつた訳でもなかつたのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃の私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口の上らないはありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまふだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切つていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢

さんの事をKに打ち明けようと思ひ立ってから、何遍齒がゆい不快に悩まされたか知れませんが。私はKの頭のどこか一カ所を突き破って、そこから柔らかい空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなた方から見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかったのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却って安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らるうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと感じていました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰ってもいいと言ったのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れません。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里に騙されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入つて行こうと言つて、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(本文)

*

*

さて、「……私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まつた訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。(明治という時代の空気がその人の性格や事情などにもよるのでしよう。)

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口の上にはありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切つていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然

調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍歯がゆい不快に悩まされたか知れませんが。(若しもこの先生という人にどこか問題があるとすれば、それは、この「躊躇」かも知れない。どうしても必要な時には、思い切つて一步を踏み出す勇氣が必要になるかと思うが、この時の先生にはそれが不十分だったのかも知れない)。私はKの頭(堅い頭)のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかない空気(柔らかない考え方など)を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたの方から見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかつたのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却つて安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らうと思われしました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門(Kの専攻は宗教学か哲学か?)こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。(つまり、自分とKとを比較対照してみたら、Kの方が異性には好かれそうなので、もしかしたらお嬢さんも「Kの方を選ぶ」のではないかと心配しているのである。)

さて、この一連の「先生とKとの様々な比較対照」は、まさにKという「人物像」を知る上では極めて、「貴重な記述」ではあるが、ただ、これは先生から見た「Kという人物像」に過ぎず、実際の「Kという人物」が一体どういう人物であつたかはまた別の問題になるのである。——例えば、太宰治という人は、自分の「人間恐怖」(人間が怖いという)ことを隠す為に、有名な「道化」を演じたとあり、また、自分の「心の弱さ」を隠すために、有名な「無頼派」を装つたともある。つまり、人間を外から見た「事実」(外的事実)と、その人自身の心の中の「事実」(内的事実)とは、もちろん、一致する場合もあるだろうし、また、全然違うという場合もあり得るといふことである。つまり、他人の「心の中」というのは、誰にとつても分かりようのないまさに「ブラックボックス」なのである。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰つてもいいと言つたのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京(お嬢さんがいる処)へ帰したくなかつたのかも知れませんが。(それはKとお嬢さんがより接近することを怖れているからである)。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里(すぐ其所が実は一里ある)に騙されながら、

うんうん歩きました。私にはそうして歩いていく意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入って行こうと言って、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(これは、結局、これというはつきりとした「目的や目的地」などを決めずに、二人でふらつと旅に出ってしまった結果、ということである。)

三十、日蓮の誕生寺と鯉

「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂って来るものです。尤も病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯る風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事が出来たのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしていとも違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でどうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経っていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。それから、判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいう言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言ひ出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会ふのは止そうと言ひました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言ひのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違ひないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であつたと坊さんが言つた時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えて居ます。Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知れたかつたのでしよう。坊さんがその点

でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々出ししました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌の晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝ようといふ少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思つていなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。(本文)

*

*

さて、「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂つて来るものです。尤も病氣とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になつたのです」。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事が出来たのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商のようなものでした。いくら話をしていとも違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。——それは、普段の日常的な生活の中の「思考(思索)活動」と、旅や旅行先で実際に様々な事物を「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ経験」しながらの「思考(思索)活動」では、その話す「内容」も気持ちも自然と違つたものになるのである。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経つていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいふ言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とも名を付けたものでしよう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言ひ出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会ふのは止そうと言ひました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言ひます。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違ひないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、

坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であったと坊さんが言った時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になってしまいいには全く黙ってしまつたのです。(これは、Kにしてみれば、自分がまじめに話をしているのに、先生はそれを真面に聞こうともしない、そのことに腹を立てているのかも知れない。)

たしかその翌る晩の事だと思えますが、二人は宿へ着いて飯を食って、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思っていないので、精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。

さて、これは先生とKとの関係は、今までのような「親友関係」から、むしろお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)になりかかつていたのであり、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳には行かず、私は私で弁解を始めたのである。

三十一、人間らしさについての議論

「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠していると言うのです。成る程後から考えれば、Kの言う通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。」

私がこう言った時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、却つて気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言つて悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌る日からまた普通の行商の態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振

りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつたと思ひ出したのです。実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれが出来なかつたのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が祟つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから兩國へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていたうちに大変瘠せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なと、久しぶりに聞いたせいでしよう。(本文)

*

*

さて、「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました」。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が「自分の弱点のすべてを隠している」と言うのです。(それは、なぜかと問えば、それは、目の前の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうのが、まさに「人間らしい」ということになるからである)。成る程後から考えれば、Kの言う通りでした。しかし「人間らしくない」意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが「彼のどこをつかまえて人間らしくない」というのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。「……君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ」とある。これは、実に見事な言葉であり、まさに「的のど真ん中」を射貫いているのである。

つまり、Kという人は、目の前の様々な「欲望や感情」などには振りまわされないようなことを言つたり振る舞つたりしているが、しかし、人間としての様々な「弱さ」は当然持ち合わせているのであり、その「弱さ」を修養で克服して、まさに「精神的に強い人間」になろうとしているのである。というのも、彼自身、「……Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言つたのです。それには(精神を鍛えるには)なるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するので

す」とあり、彼が目指したものは、恐らく、（誰にも依存しない）「独立独歩の道」（或いは「精神の自立」）のようなことではないかと思う。）

私がこう言った時、彼はただ「自分の修養が足りない」から、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたといふよりも、却って気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言って悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。（英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない）。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。（つまりKもそのような道を歩んでいるということである。）

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌日からまた普通の行商の態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かったと思ひ出したのです。これは実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。（それは「自分はお嬢さんのことが好きだとKに打ち明けること」であるが）、私にそれが出来なかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が祟つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。（ここは先生ならではの「微妙な心理」であり、氣取つているのでも、虚栄心からでもなく、ただ思い切つて自分はお嬢さんが好きだと真つ正面からKにぶつかつていくだけの勇氣が欠けていた）。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。（つまり旅先の「思考」《思索》活動から普段の「思考」《思索》活動へ）と戻つたということである。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていたらうちに大変瘡やせてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑ひ出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時の（お嬢さんの笑ひ）だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

*

*

三十二、旅行後のお嬢さんの態度

三十二、旅行後のお嬢さんの態度

「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったので、その世話をしてくれる奥さんとはとにかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかつたろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛ててくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する愷歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰ったのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといいと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関が上がって仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰つたのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入ってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと云って私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だつたのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかつたのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になつて来ました。Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入つて、ゆつくりしていました。無論郵便を持つて来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の關係上、当然と見なければならぬのです。ところが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を

出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張って来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。(本文)

*

*

さて、「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変わっているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんとはかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかったのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛てくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する慥歌を奏しました」とある。

これはもちろん、二人が旅に出ている間、奥さんが「お嬢さん」にそうするように注意を促したのであり、その理由は、お嬢さんがKという人に必要以上に優しく過ぎてKに変な誤解を与えないためと、もう一つは、奥さんもお嬢さんも結婚する相手は「先生」と決めているからである。これは最初から一貫して少しも変わることはないのに、先生だけがああでもないこうでもない余りに余計なことを考え過ぎてしまつて、自ら問題を複雑にして勝手に深く悩み苦しむことになるのである。」

やがて夏も過ぎて九月の中頃から(大学三年の新学期で)我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰つてもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰つたのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。(ここまでは奥さんの言いつけを守っていたのである。)

たしか十月の中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻つて来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといまいと思つていたKの声がひよいいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関に上がつて仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰つたのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入つてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと云つて私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だつたのです。お嬢さんはすぐ座を立つて縁側伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかつたのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいつしよに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、そのくらしいの交通は同じ宅にいる二人の關係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出してもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張つて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。

*

*

さて、「……ぜひお嬢さんを専有したい」という強烈な一念に動かされている私」とあるが、これは、第一部の「恋（恋愛）」のところ、先生の「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている場面があつたが、今、まさに親友（K）とお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの凄まじいまでの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」（恋愛）であり、今、まさに「Kとお嬢さんとの關係」が一体どうなっているのか？ 気になって気になつてどうしようがない「精神的状態」であり、それは、次のような「出来事」で、さらに「ピーク」へと達するのである。

三十三、糠る道でKとお嬢さんに遭う

「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上つて宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったのでから、私はどうした訳かと思ひました。奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話す声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅

も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きませんが、誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずでした。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこまでと言ったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。(本文)

*

*

さて、「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上って宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。(先生は、ふと差別を受けたような感じがしたのかも知れないが、しかし、事情を聞けば、Kは帰ってまた出たということ、Kの室の火鉢に火が燃えていても不思議はないのである。)

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったので、私はどうした訳かと思いました。

(疑念が生じたが)、奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心

のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺（三十〜六十センチ）しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこまてと言ったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。（ここまでは偶然Kに出合ったということは何の問題もない。問題なのは、次である）。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。（この時、先生の「頭の中」にあつたものは、なぜ二人は一緒にいるのだろ、うかという疑念である。）

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。

三十四、先生のKに対する嫉妬心

「……私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりません。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくになりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中てみるとしまいに言うのです。その頃の私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよっと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、

始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対してお嬢さんの技巧と見做してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時に最も迂遠な愛の実家だったのです。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。(本文)

*

*

さて、「……私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会つたから連れ立って帰つて来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。(先生としては少しほつとしたが)、しかし食事の時、またお嬢さんに向つて、同じ問いを掛けたくありませんでした。(それはお嬢さんの証言も得て、安心しなかったたのである)。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中てみるとしまいに言うのです。(この時のお嬢さんの心理は、一人の仲を気にしている(疑っている)先生を見て笑い、一方、自分がそれほど信じられないのかと腹を立ててもいるのである)。その頃の

私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だけたのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよつと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです」とある。

例えば、お嬢さんを専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）が強ければ強いほど、それだけ殆んど取るに足りない些細なことにも、もの凄い「嫉妬心」に襲われてしまうものであるが、結婚をすれば、彼女は「すでに手に入れている」（つまり専有は当たり前前の状態）になっているので、それゆえ、彼女を何が何でも専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）も自然と弱まって行き、そして、その「独占欲」が弱まれば、その分「嫉妬心」も弱まって行くのである。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったためではありません。Kの来ないうちには、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、二度と他人には騙されぬぞという決心が、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。（先生はもつと自分に自信を持ってよかつたのである）。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのと少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。（そうであるならば、なぜお嬢さんに自分のことが好きかどうかを直接確かめなかつたのだろうか？）

世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰って嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったので。同時に最も迂遠な愛の実際家だったので。つまり、先生という人は、いわゆる「相思相愛」であることを強く望んだのである。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長く一緒にいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。(これは一体どういう意味なのか? 例えば、先生という人は、お嬢さんに直接「愛の告白」はしていない。奥さんに直接(お嬢さんへの)「愛の告白と結婚の申し込み」をしている。そして、先生という人は、お嬢さんの気持ちも確かめた方がいいと進言すると、奥さんは「……大丈夫です」と言う。つまり、お嬢さんも先生との結婚は納得済みであったということである。

しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。——例えば、先生がお嬢さんに直接「愛の告白と結婚の申し込み」をしたとしても、(日本の習慣として、そういう事は許されていないとあるのは)、お嬢さんは自分の判断だけでは答えることは出来ず、結局、母親に相談してみなければ答えられないと言ふことになるからである。また、昔は、多くの場合、親が結婚相手を決めていたのであり、それゆえ、たとえ二人が好き合っている、親が認めなければ、結婚は出来ないのである。また、若い女性の場合、自分の方から「愛の告白や結婚の申し込み」をするのではなく、相手からの「愛の告白や結婚の申し込み」を待つということでもあったのだろう。

*

*

三十五、正月に歌留多取りをする

三十五、正月に歌留多取りをする

「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、どうしても手足の動かせない場合があります。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。」

その内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多をやるから誰か友達を連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多などを取る柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎そんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ちやつておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々の小人数だけ取ろうという歌留多ですからさぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐手をしている人と同様でした。私はKに一体百人一首の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと言へました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑するでも取つたのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人が殆んど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。

それから二、三日経つた後の事でしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くと言つて宅を出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、ただ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顛を支えたなり考えていました。隣の室にいるKも一向音を立てませんでした。双方ともいるのだから分らないくらい静かでした。尤もこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかつたのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切りの襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考へていると聞きました。私はもとより何も考へていなかったのです。もし考へていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だつたかも知れませんが。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答へる訳にいかなくなつたのです。私は依然として彼の顔を見て黙つていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両肱を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだらうと言うのです。私は大方叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過だのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないとお嬢するより外に仕方がありませんでした。(本文)

*

*

さて、「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼まなこだけ覚めて周囲のものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありましよう。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。(この停滞状態を一気に吹き飛ばす或る出来事が起きるのである。)

その内年うちねんが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるとをやるから誰か友達だれを連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達ともなどは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往來わらいで会った時挨拶あいさつをするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多かるとなどを取る柄がらではなかったのです。(つまりKの友達「親友」は先生だけなのである)。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事なまへんじをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩ばんになつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々うちうちの小人数こじんずだけで取ろうという歌留多かるとですからさぶる静かなものでした。その上こういう遊技あそびをやり付けないKは、まるで懐手ふところをしている人と同様どうようでした。私はKに一体ひやくにん百一首の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。(だとすれば、文学への興味はそれ程ではなかったのかも知れない。日蓮の時とは全く違ふ)。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑けいべつするとても取つたのでしよう。それから眼まなこに立つようにKの加勢かぜをもしました。しまいには二人が殆んど組ぐみになつて私に当るといふ有様ありさまになつて来ました。私は相手次第けんかでは喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。(この場面は、いかにも正月という雰囲気ふんいきを出すためのものかも知れない。)

*

*

それから二、三日経たつた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ行くと言つて宅うちを出しました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居くしゅい同様あとに残つていました。私は書物しよぶつを読むのも散歩さんぽに出るのも厭いやだつたので、ただ漠然もくぜんと火鉢ひばちの縁えりに肱ひじを載のせて凝じつと頤もを支たえたり考えていました。隣の室むろにいるKも一向いっかう音を立てませんでした。双方ふたうともいるのだから分らないくらい静かでした。尤もつともこういう事は、二人の間柄まなづかとして別に珍めづしくも何ともなかつたのですから、私は別段べつたうそれを気にも留めませんでした。(まず、この場面の設定ていじやうは、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃ころだつたので、二人は室むろで静かにしていた。つまり、ここに「二人だけの設定」が出来上がるのである。)

十時頃じゅうじころになつて、Kは不意ふいに仕切りしきりの襖ふすまを開けて私と顔かほを見合みあわせました。彼は敷居しきいの上うへに立つたまま、私に何を考かんがえていると聞ききました。私はもとより何も考かんがえていなかつた

のです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回って、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を、一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。私はすぐ両腕を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。(Kは、十時頃、不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えていると聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。つまり、二人は火鉢の前に坐った状態になる。)

すると、Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうかと言うのです。私は大方叔母さんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎなのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうかと質問するのです。私はなぜだか知らないかと挨拶するより外に仕方がありませんでした。(先生はもちろん、なぜKは今日に限って、そんなことを聞きたがるのだろうか、不思議に思ったに違いない。)

三十六、Kのお嬢さんへの恋心の告白

「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はどうして今に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ疝付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は恐ろしさの塊りと言いましようか、または苦しみの塊りと言いましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでしたが。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策だったと思えました。先を越されたなと思えました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がな

かったのでしよう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

午食の時、Kと私は向い合せて席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいいない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。(本文)

*

*

さて、「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいに私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。

私はどうとなぜ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来「無口な男」でした。平生から「……何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました」。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた「何か出て来るな」とすぐ瘡付いたのですが、それはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から「……彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けた時の私を想像して見て下さい」とある。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は「恐ろしさの塊り」と言いましようか、または「苦しみの塊り」と言いましようか、何しろ「一つの塊り」でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ「失策だった」と思いました。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあったらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたわけではありません。ただ「……何事も言えなかつたのです。また言う気にもならなかつたのです」とある。

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいっ帰るのだから分りませんでした。(此所までの一連の場面を簡単に要約してみると、次のようになるかと思う。)

*

*

さて、年が開けて正月になり、ある日、内々だけで歌留多をすることがあつたが、それから二、三日経つた頃、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃だったので、二人は室で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えているのかと聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたってゐる火鉢の前に坐り、奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するので、私はなぜ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねると、彼は突然黙つたが、彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視した。彼は元来無口な男で、平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖があつたのです。彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ瘡付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかつたのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみして下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。その時の私は恐ろしさの塊りというか、苦しさの塊りというか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなって、呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事に、私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しましたが、すぐ「失策つた」と思いました。先を越されたなと思ひました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起らず、恐らく起るだけの余裕がなかつ

たのでしよう。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行き、私は苦しくって堪りませんでした。おそらくその苦しさは、私の顔の上にはつきりと表れていたはずであり、いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に集中しているので、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょうか。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で、重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを受け、私の心は半分その自白を聞きながら、半分どうしよう、どうしようという念に絶えず掻き乱されていたので、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響き、そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に自白をしたものか、それとも打ち明けずにいる方が得策か、私はそんな利害などを考えて黙っていたのではなく、ただ何事も言えなかったのです。(それだけ「驚きの衝撃」が余りに大き過ぎたという事である)。午食の時、Kと私は向い合せに席を占め、下女が給仕をしてくれたが、二人は食事中ほとんど口を利きませんでした。

そして、この時から、二人は子供の頃からの親しい「親友関係」から、はつきりとお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)に決定的になつてしまつたのである。

三十七、Kの告白後の先生の心の状態

「……二人は各自の室に引き取つたぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべき筈だと思ひました。しかしそれにはもう時機が後れてしまつたという気も起りました。なぜ先刻Kの言葉を遮つて、こつちから逆襲しなかつたのか、そこが非常な手落りのように見えて来ました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたらうにとも考えました。

Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖を開けて向うから突進して来てくれれば好いと思ひました。私に言わせれば、先刻はまるで不意撃に会つたも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下心を持つていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまで経つても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考へているだろうと思つと、それが気になつて堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合つて居る場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったので、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。一旦言いそびれた私は、また向うから働き掛けら

れる時機を待つより外に仕方がなかったのです。

しまいに私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑に注いで一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往來の真中に見出したのです。私には無論どこへ行くという的もありません。ただ凝としていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻ったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落す気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えませんでした。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐っている彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底出来ないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人氣のないように静かでした。(本文)

*

さて、その後、二人はそれぞれの室に戻った後、私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。また、なぜ先刻Kの言葉を遮って、こつちから逆襲しなかったのか、せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話していたら、まだ好かったろうにとも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でしたし、私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨(後悔)に揺られてぐらぐらしました。(中略)

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。(ふと、このような時に無意識のうちに生じて来る予感、というものは、意外と当たることが多く、結局、先生という人は、Kという親友に永久に崇られることになるのである。)

*

*

一、先生の想い

一、先生の想い

さて、この『こころ』という作品のなかで、最も大事な部分というのは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、親友である「K」が、親友である「先生」に、ある日、突然、「お嬢さんへの切ない恋心」を打ち明けるといふ部分である。ここがまさに「分岐点」であり、これによって、まさに事態が「大きく動く」ことになるからである。つまり、その当時はまだ大学生であった「先生」という人は、軍人の未亡人である奥さんとお嬢さんそれに一人の下女が住んでいる所に「下宿」することになるのである。そして、そのことが、結果として、まさに一つの「運命的な出逢い」ともなるわけだが、それは、その奥さんとお嬢さんと一緒に生活を親しくなっていくに連れて、やがてその「お嬢さんのことが好きになっていく」ということである。もちろん、それ自体は、むしろ「自然な流れ」であり、何も不思議なことでも何でもない。それゆえ、むしろ最大の「問題」なのは、そのことをいつまでも「言い出せずにいる」状態が、ずっと長く続いたということである。その理由として、Kの来ないうちは、他的手（奥さんの手）に乗るのが厭だという我慢が私を抑え付けて、一歩も動けないようにしていたとある。——この時、勇気を奮って、奥さんに向かって、「……お嬢さんが好きです。お嬢さんを愛しています。お嬢さんを私にください」とはっきりと言っていたならば、恐らく、「先生」という人の「人生」は、今とは全く違った「人生」が開けていたかも知れない。それは、お嬢さんとの「関係」においても、また、社会との「関係」においても、そして、人間との「関係」においても、すべてにおいて積極的になれたかも知れないのです。なぜなら、奥さんもお嬢さんも、その「言葉」（愛の告白と結婚の申し込み）をずっと待っていたからである。

二、中心テーマは

つまり、「先生」（当時は大学生）という人が、そのまま素直にお嬢さんに「愛を告白」していたならば、それで何らの「事件」も起こることもなかったのである。しかし、それでは、所謂「小説」にはならない。「小説」となるためには、むしろ「事件（問題）が起こる」必要がどうしてもあったということである。そこで、その「下宿」先に「先生」の親友である「K」という人物を同居させて、いわゆる「先生とお嬢さんとK」とのいわば「三角関係」というものを生じさせることになる。それでは、なぜ、そのようなことをするのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、作者（夏目漱石）自身、いわゆる「三角関係」という「問題」（もちろん、その「三角関係」にも実に様々な「組み合わせ」があるだろうが）、その中でも、一人の女性をめぐる二人の「親友同士」との「三角関係」というものを、何が何でも書いておきたかった。それは、文字通り、まさに自分の「遺言」として書いておきたかった。それは、なぜなのか？ 作者（夏目漱石）自身、そのような「経験」があったからなのか？ それとも、同じような「心的状態」（つまり倫理的に、「罪を背負う」という「心の葛藤」）を宿していたからなのか？ それは、何とも言えないが、ただ、作者（夏目漱石）自身、正確には「先生」という人は、まさに「恋は罪悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのか？ それは、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つくことになる。人を傷つけずにはおかないものだからである。

誰もが「罪の意識」（或いは「良心の呵責」というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋（恋愛）は罪悪である」とともに、人間の「罪」（悪業）というものを誰もが嫌が上でも「思い知る」ことになるのである。

それをもっと広げれば、例えば、友達関係、同居関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことである。つまり、「男女」（或いは「同性」）同士が、本気で相手と深く「関わる」（或いは「愛する」）ことになれば、必ず、お互いの「利己的自我（エゴ）」と利己的自我（エゴ）」とが本気でぶつかり合うことになる。そして、お互いの関係が「うまくいっている」時には、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るかも知れないが、一方、お互いの関係が「うまくいかなかった」時には、逆に、「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。つまり、本気で相手と深く「関わる」ということは、まさにそういうことであり、しかも、それが「男女の関係」であれば、それだけより「どろどろとした生々しいもの」になっていくということである。

それは、『こころ』という作品の中でも、例えば、Kとお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまう。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——それは、いったい何を意味しているのかと問えば、それは、相手の「愛情」が「他の対象」へと向かうことを「恐れている」のである。それでは、なぜ、それを「恐れる」のだろうか？ それは、相手の「愛情」が自分に向かっているからこそ、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るのであり、逆に、相手の「愛情」が自分以外の「他の対象」へと向かってしまうということは、今まで得ていたその様々な「喜びの感情」を味わうことが出来なくなってしまうとともに、今度は、逆に、実に様々な「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。

三、Kの告白の理由

それでは、親友である「K」は、なぜ、親友である「先生」にお嬢さんへの切ない恋心を敢えて「告白」（打ち明けた）のだろうか？ ここが「最大」の問題である。というのも、わざわざ「告白」などしなくてもよかったからである。それを敢えて「告白」することによって、一体、何を考えていたのだろうか？ 可能性としては、もちろん、実に様々なことが考えられるかと思うが、まず、Kという人は、いわゆる「理想」（それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」（それは「お嬢さんへの切ない恋心」との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、しかし、ふつうに考えれば、「K」という人が、「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、そして、もう一つは、親友である「先生」との関係もあるからである。

それは、先生という人も（恐らく）「お嬢さんのことが好きなんだろう」ぐらいのことは、Kという人もうすうすは感じていたであろう。もしそうだとすれば、いったいどうし

たらよいのかと「深く悩む」ことにもなるだろう。——つまり、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」を諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に辛いことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。このような場合、一体、どうしたらよいのかと問えば、ふつうであれば、それは、結局、「男同士」で何らかの形で決着をつけるのか、それとも、相手の「女性」に決めてもらうのか、あるいは、誰か「第三者」を介して、まさに「問題の解決」を図るのか、何とも難しい問題であるが、もしそれが出来なければ、いわゆる「三角関係」というものは、延々と続いていくことになる。つまり、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

ところで、ここで「考え方」を少し変えてみると、それは、「K」という人間は、やがて「自殺」することになるが、それは、余程のことであり、それゆえ、一つの「賭け」（或いは「勝負」）だったのかも知れない。それは、親友である「先生」の反応がぜひとも知りたかったということである。——つまり、「K」は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていただろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るといふことには、やはり「ためらい」が生じたのかも知れない。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったということである。それは、一人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どういう「反応」を示すのか？　つまり、お嬢さんのことが好きになった、という告白を聞いた時に、親友である「先生」（当時は大学生）がどのような「反応」を示すかによって、いわゆる「先生」の「心の中」がぜひとも知りたかった。それによつて、自分もどうしたらよいかが見えて来るからである。そして、もし、その告白を聞いて、「……いいじゃないか、それなら、お嬢さんと付き合ったらいいよ」というような、いわば「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということであり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。——ところが、親友である「先生」の反応は、そういうものではなかった。それは、ショックが余りにも大き過ぎて、その時、「何も言えなかった」という反応である。

四、先生の反応

さて、先生は、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、「あつ、失策だった！」という想いで一杯になっていたのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち開けようと思いがながらも、なかなか言い出せずにいたところを、Kに先越されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さ

んのが好きなんだということを、なかなか言い出せずにいたわけである。そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続くことになるが、やがて、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにこことばかりに、一気に「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを絶対に失いたくないという一心からだっただと思いが、この時の「対応（策略）」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

*

*

三十八、二人は寡黙かもくで夕飯ゆうめしを食べて床に就つく

三十八、二人は寡黙で夕飯を食べて床に就く

「……私が家へ這入ると間もなく俵（人力車）の音が聞こえました。今のよう護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言（寡黙）でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったので。すると今度はお嬢さんがKと同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい臉を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷つておられるかと思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言つたのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持つて来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖めるがいいと言つて、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈をふつと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかった

のですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(本文)

*

*

さて、「……私が家へ這入ると間もなく俵(人力車)の音が聞こえました。今のように護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりましたとある。(人力車の車輪は、一九〇七年《明治四十年》代になり、ようやく木製の車輪は、「ゴム輪」へと代わったそうです。)

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。(二人とも食事が楽しめる気分ではなかったのです)。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言(寡黙)でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい瞼を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらもまた何かむずかしい事を考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。(お嬢さんにそう言われたことで敏感に反応しているのかも知れない。)

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐って、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖めるがいいと言って、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。(この蕎麦湯は、江戸時代から飲まれていて、蕎麦を茹で続けると「茹で湯」に蕎麦の「香りや栄養」も蕎麦湯に移ってしまう。そこでその栄養のある「蕎麦湯」を飲むと、「胃腸に良い」とか「元気になる」とか信じられていたのです。)

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時

二十分だと答えました。やがて洋燈をふっと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。(一九一二年《大正元年》東京市内に電灯がほぼ完全普及する。)

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。「……そう、だなあ」と低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(Kが曖昧な返事ばかりを繰り返すので、先生という人はイライラするばかりなのかも知れない。)

三十九、Kに告白の真意を聞く

「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。」

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたろ始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往來でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんに

も通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思ったのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却って彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往來だからわざわざ立ち留まって底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなれば、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。(少し積極的に出て見ようという決心である。)

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変った点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにとっとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと思つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと思つてきました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたる始まりました。(正月明けの後半の学期)、私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外

部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」と明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知つていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却つて彼を信じ出したくらしいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかつたのです。(つまり、Kの「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」というこの言葉を、先生という人は、そのまま「信じた」と言うことである。)

私はまた彼に向つて、彼の恋を「……どう取り扱うつもりか？」と尋ねました。それが「……単なる自白に過ぎないのか？」、またはその自白について、「……實際的の効果を、も収める気なのか？」と問うたのです。(先生が知りたいのは、まさにそこである)。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思つた通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まつて底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(ここまでの内容は、まさに「書いてある通り」であるが、大事なのは、次の「図書館」の場面からである。)

*

*

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る(前半部)

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る（前半部）

「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待っていればしいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があって、談判でもしに來られたように思われて仕方がないので。私ははやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。（前半の本文）

*

*

さて、「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあり、私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

ところで、学問には、「人文科学」と「社会科学」それに「自然科学」とがあるかと思いが、まず、「人文科学」では、「人間とは何か、また、人間の所産（人間が生み出したもの）を研究の対象とする学問である。例えば、哲学、文学、歴史学、考古学、心理学、宗教学、言語学、その他などがあるかと思う。また、「社会科学」では、社会における「人間の営み」の研究を行なう分野であり、例えば、政治学、経済学、法学、社会学、教育学、国際研究、コミュニケーション、その他などがあるかと思う。そして、「自然科学」では、自然に属する諸々の対象を取り扱い、その法則性を明らかにする学問であり、例えば、物理学、天文学、地球科学、生物学、化学、工学（科学技術）、その他などがあるかと思う。さて、先生の「専攻の学科」であるが、先生はもちろん、「社会科学」や「自然科学」

などの分野ではない。だとすれば、「人文科学」であるが、その「人文科学」の中の何かということになるが、それは恐らく、「文学か哲学」のようなものかと思う。一方、Kという人の「専攻の学科」であるが、それは、日蓮のことをはじめ、Kの言う昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。(英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない)。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すとあるので、恐らく、「宗教学」(或いは「哲学」)のようなものになるかと思う。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってればしてもいいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方ないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

四十、上野公園で先生にどう思うかと尋ねる(後半部)

二人は別に行く所もなかったのですが、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うと言ふのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思ひました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上つてはいなかつたのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違ふと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言ひました。そうして迷つているから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言ひました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言つただけでした。實際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかつたならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切つた顔の上に慈雨の如く注いでやつたか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れて來た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違つていました。(後半の本文)

*

*

さて、二人は別に行く所もなかったもので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っぱり出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向ってちつとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と「どう思う？」と言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。「一言で言うと、「……彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです」。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思いました。たびたび繰り返し返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんなに進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。」

私がKに向って、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言いました。そうして「……迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうたので、私に公平な批評を求めより外に仕方がない」と言いました。私は隙かさず「迷う」という意味を聞き糺しました。「……彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだ」と説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして「……退こうと思えば退けるのか」と彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ「苦しい」と言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。

例えば、Kという人は、なぜ「進む方向」へと向かわないのか？ お嬢さんにはこれという婚約者はいないのだから、誰に遠慮することなく思いきって「愛の告白」をしたらよいのである。それなのに、Kという人は一体何をためらっているのだろうか？ なぜ一歩を踏み出すことに躊躇しているのだろうか？ それには、次の「二つの理由」があり、一つは、いわゆる「理想の問題」（それは「道を一心に精進すること」そのためには色恋は邪魔になる）のであり、そして、もう一つは、やはり「先生の問題」があるのである。

つまり、Kという人は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということぐらいは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていたであろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るということには、やはり「ためらい」が生じたのではないかと思う。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったということである。それは、二人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どのような「反応」を示すのか？ その先生という人の「心の中」がどうしても知りたかった。それによって、自分もどうしたらよいかはつきりと見えて来るからである。そして、若しもそれが「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということにもなり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。一方、先生という人は、もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、（例えば、それならつき合ったらいいじゃないかと）、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもって生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の

私は違っていました。(先生という人は、ここで一気に「反撃」に出るのである。)

四十一、先生のKに対する最初の反撃

「……私はちやうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽の羞恥だのを感じず余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り返して来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかったのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つてそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上はどう影響するかを見詰めていました。「……馬鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。

Kはびたりとそこへ立ち留ったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。

しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。(本文)

*

*

さて、「……私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適當なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした」。

Kが「理想」(道への精進)と「現実」(恋への想い)の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感じる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言で「……Kの前に横たわる恋の行手を塞ごうとした」のです。(先生の目的は、Kの恋の行手を塞ぐことだけであつた。)

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかつたのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、撰欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかつたのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違ひなかつたのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つて(恋の横道へと逸れるのを)「今まで通り積み重ねて行かせようとした」のです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。(人間はお互いの「利害や感情」がぶつかり合うから揉事になるのであり、お互いの「利害や感情」がぶつかり合わなければ、今まで通りの「関係」でいられるのです)。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

そして、「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にとどう影響するかを見詰めていました。「……馬

鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。(これは迷っているのも馬鹿であるが、他人に相談したことも馬鹿であるということかも知れない。つまり、先生の「反撃」は予想外であり、いつもの「先生とは全く違う」という感じを抱いたに違いない。それは、お嬢さんをめぐってのまさに「恋敵」《敵同士》になつてしまつたからである。)

Kはびたりとそこへ立ち留つたまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗(居直つて自分に襲いかかつて来る)の如く感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしなかつたのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。

四十二、先生の最初の反撃に対するKの反応

「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言つた方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思つていたので。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はつと我に立ち帰つたかも知れません。もしKがその人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。」

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

「……もうその話は止めよう」と彼が言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「……止めてくれて、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の前で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。

私がこう言つた時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事もない」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて着味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ噛じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰って食卓に向った時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。(本文)

* * *

さて、「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言った方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窺めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。(これは、何が何でもお嬢さんを奪われたくない、また、何があつてもお嬢さんだけは失いたくないという、そのような「想い」が余りに強過ぎて、先生ですから、本来の「健全な精神」を失つてしまつているのである。)

例えば、異性を「本気で好きになる」(或いは本気で「愛するようになる」と、まさに「……誰もが相手の異性を是非とも専有(独占)したいという強烈な一念に襲われるもの」)であり、それゆえ、相手の異性がほかの誰かとかにもかにも親しうに話をしてる場面などに出つくわすと、その人の「心の中」では、もう抑え難いほどのもう気が狂わんばかりの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうものである。——それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)であり、——例えば、先生は、「……恋(恋愛)は、罪悪である」と言っているが、それは、どれほど真面目な人であっても、(先生もそうであるが)、一度、本気で「恋」(恋愛)に深く陥つてしまうと、ふだんの「知性や理性」などに支配されていた「冷静な判断」などはとても出来にくくなり、まさに「正気」を失つて、ふだんではとても考えられないようなことを「言つたりやつたりするようになる」のである。そういう意味では、「恋」(恋愛)というのは、一面では、ふだんの冷静な「知性や理性」などの働きを鈍らせる一種の「狂気」にも近いものになり易いのである。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

Kは、「……もうその話は止めよう」と言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。「……止めてくれって、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。(これは、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。)

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったので。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事も無い」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。この「覚悟」という言葉が、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にいつまでも重苦しく残ることになるのである。

*

*

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて蒼味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ嘔じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になつて、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにと言つて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

一、先生の最初の反撃(反撃一)

さて、先生という人は、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続

くことになるが、しかし、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにことばかりに一気に「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを「絶対に失いたくないという一心からだ」と思うが、この時の「対応(策略)」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

それでは、それは、いったいどのような対応だったかと言えば、それは、次のようなものである。つまり、「……私はちようど他流試合でもする人のようにKを注意して見えたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒すことが出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私はまず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と言い放ちました。私はその一言でKの前に横たわる恋の行方を塞ごうとしたのです。というのも、Kは、真宗寺に生まれ、昔から精進という言葉が好きでした。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条であり、それゆえ、摂慾や禁欲はむしろ、たとえ慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。だからこそ、この言葉がKには痛いだろうと思っただけです。……」

一方、「K」は、それに対して、「……もうその話は止めよう」と彼が辛そうに言い出した時、私は、彼に向って残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉管へ食いくように。「……止めてくれって、僕が言い出したことじゃない。もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。それに対して、「K」は、「覚悟？」と聞き、やがて、「……覚悟、——覚悟ならないこともない」とつけ加えた、という展開になるのである。

*

*

四十三、
上野うえのから帰った晩、二人は……

四十三、上野から帰った晩、二人は……

「……その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があったからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向って猛進しないと行って、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、私に取って比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもっていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になっていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押して見ました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそ

ここに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。(本文)

*

*

さて、「……その頃は覚醒とか新しい生活とか新しい生活のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があったからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向って猛進しなうと言つて、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

さて、Kという人が一直線に愛の「目的物」に向って猛進しなうと言つて、決してその「愛」の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。それは一体なぜなのかと問えば、それは、「……彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があったからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言つてもいい位なのです」。それでは、その「尊とい過去」とは一体何かと問えば、それは、次のような事である。つまり、Kという人は、昔から常に「精進」という言葉を使つて来たのです。彼の「行為・動作」は悉くこの「精進」の一語で形容されるものであり、道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。それから節慾や禁欲はむろん、たとい慾を離れた「恋」そのものでも道の妨害になるのです。それゆえ、Kがもし「理想」「道への精進」の方を選べば、まさに「現実」「恋への想い」は断ち切らなければならぬ、一方、若しも「現実」「恋への想い」の方を選べば、まさに「理想」「道への精進」を断念せざるを得ない。だからこそ、「……苦しい」と言つているのであり、そのような二律背反の「究極の選択」を迫られているのであり、それゆえ、Kという人は、「……自分でももう自分をどうしてよいか分なくなつてしまひ」、そこで「……先生に公平な批評を求めるより外に仕方がなかった」となるのである。(もちろん、その場合、Kという人が若しも「現実」「恋への想い」の方を選べば、今度は「先生との問題」が必ず生じることになるのです。)

*

*

上野から帰つた晩は、私に取つて比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもつていたのです。(これは、Kが「恋」の方を選んで、まさか「道」の方を捨てるようなことは出来まいと見ているのである。)

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚まししました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして

彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでに聞いて見ただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言ひます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。(これは、今までは「Kの切ない恋の告白」により、先生という人は、このままではKにお嬢さんを取られてしまうかも知れないと思ひ、どうしようどうしようという「氣持ち」でいたが、先生の「Kへの反撃」によつて、いわば「形勢」が逆転して、今度はKの方が追い詰められた感じになつて居るのです。)その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つていた私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押して見ました。(あの時、Kは何か言ひたかつたのか、それとも何か聞きたかつたのかはよく分らない)。しかし、Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

四十四、覚悟という言葉と奥さんへの談判

「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちやんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がかもしこの驚きをもつて、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかつたかも知れませんが、悲しい事に私は片眼でした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのが

すなわち彼の覚悟だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもお嬢さんいなくなって、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出しました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗つていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手を持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言つて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らぬような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言いはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおっしゃつたんですか」と却つて向うで聞くのです。(本文)

*

*

さて、「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼(吟味)しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段(何かを執行する事)を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で「覚悟」の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がおもひこの「驚き」をもつて、もう一返彼の口にした「覚悟」の内容を公平に見廻したならば、まだよかつたかも知れません。悲しい事に私は片眼

(片方しか見ていなかった)のです。私はただKが「お嬢さんに対して進んで行く」という意味にその言葉を解釈しました。それは、果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち「彼の覚悟」だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

Kがもしそうであれば、私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいました。

例えば、われわれ人間は、それが何であれ、最初の一步を踏み出すまでは、とかくあてもないこうでもないといういろいろと考へ過ぎてしまいためらいがちになるが、しかし、最初の一步を踏み出してしまえば、あとはもうその勢いで前に進むしかないのです、自然とより「活発な動き」になつて行き、あとはなるようになって行くことが多いだろう。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもなく、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈托していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下させた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。(これも最初の一步が言い出せないでいるのです。)

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言いはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思ひも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおっしゃったんですか」と却つて向うで聞くのです。

四十五、お嬢さんを下さいと言う

「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気になかった私は、「いいえ」と言つてしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何

も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「……下さい、ぜひ下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずつと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答えたなら笑い出しました。そして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようには判然としたところのある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大変心持よく話の出来る人でした。「……宜ごさんす、差し上げましょう」と言いました。「……差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言いました。

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な気持ちになりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き返もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たなら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つたのかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲つてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかつた私は」、「いえ」と言つてしまつた後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言ひ直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待つています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言ひました。奥さんは私の予期してかかつたほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言ひ出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「……下さい、ぜひ下さい」と言ひました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言ひました。奥さんは年を取つてはいるだけに、私よりもずつと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じやありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答へたら笑ひ出しました。そうして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言ひ出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然としたところのある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大變心持よく話の出来る人でした。「……直ぐさ、差し上げましょう」と言ひました。「……差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言ひました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと言ひました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言ひました。（これはもう奥さんはその言葉をずっと待つていたという事であり、それは、お嬢さんも全く同じことになるのである。）

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な氣持になりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという觀念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたやうなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たなら、すぐ話そうと言ひます。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないやうな氣もするのです。私はどうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つた

のかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲ってしまいました。

二、先生のもう一つの反撃（反撃二）

さて、先生のもう一つの「反撃」は、とにかく、Kより先に「お嬢さんを下さい」と奥さんに願ひ出ることでした。それは、Kもお嬢さんも二人とも留守の時を狙ってと考えていたが、なかなか二人が留守という状態にならず、一週間が過ぎた後、先生は、「仮病」を使って学校を休み、そして、Kもお嬢さんもいなくなり、十時頃まで寝ていたが、病気ではないので、起き出して、いつものように顔を洗って、茶の間で朝食とも昼食ともつかない食事をした後、奥さんに話を持ち出すことになる。もちろん、最初は、なかなか言い出せずにいたが、やがて、私は突然、「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さいと言いました」とある。この言葉を先生は、もつと早く、Kが同居する前に言っておくべきだったのである。そうすれば、Kの「自殺」も先生の「人生」も全く違ったものになっていたに違いない。その時、奥さんは、「……上げてもいいが、あんまり急ではありませんか」と聞くのです。「……私が急に貰いたいです」とすぐ答えたら笑い出しました。そして、「……よく考えたのですか」と念を押すのです。「……私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました」とある。この「部分」を丁寧に読むだけでも、遂にその日が来たかと、奥さんの「心の中」が透けて見えて来るような対応の「仕方」になっているかと思う。

そして、「……奥さんは、宜ごさんす、差上げましょう」と言いました。「……差上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰って下さい。ご存じの通り父親のない憐れな子ですと後では向うが頼みました」とある。さらに、「……話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない。後から断われればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえたしかめるに及ばないと明言しました。（中略）、親類はともかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしい」と私が注意した時、奥さんは、「……大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があるの子をやるはずがありませんからと言いました」とある。——これは、もう奥さんは、先生が「いつその言葉を出す」か、ずっと待っていたということであり、それは、お嬢さんも全く「同じ気持ち」であったということである。それゆえ、先生がもつと早く「結婚の申し入れ」を行なっていたならば、この三人は、どれほど「幸せな家庭」（或いは「幸せな家族」）になっていたかも知れないのである。

それは、第一部でも、先生自身、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女は殆んど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずだ」と語っているのである。

*

*

四十六、外を歩き回まわって宅うちに帰る

四十六、外を歩き回って宅に帰る

「……私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺のした書物などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えていました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往來の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上って、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうと言つて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたその位の事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほつと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。

けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はつい自分
で自分をKに説明するのが厭いやになったのです。(本文)

*
*

さて、「……私は猿楽町さるがくちょうから神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの
界限かいげんを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物
などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えてい
ました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの
想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その
上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さ
んにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済
んだ頃だとも思いました。(つまり先生の「頭の中」はその事だけで一杯になつていたの
であり、それゆえ、外ほかのことを「考える余地」はなかったのである。)

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上つて、本郷台へ来て、それからまた菊坂
を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨またがって、
いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考え
なかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りませ
なかつた不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見れば
それまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、
すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向つて書
見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はい
つもの通り今帰つたのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いのか、医者へ
でも行つたのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなつ
たのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしK
と私がたった二人曠野の真中にも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、
その場で彼に謝罪したろうと思えます。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで
食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少
しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつも嬉うれしそうでした。
私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんは
いつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今
と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと
奥さんに尋ねました。奥さんは大方「極り」が悪いのだろうと言つて、ちよつと私の顔を
見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮ついきゆうしに掛かりました。奥さ
んは微笑しながらまた私の顔を見のです。(この極りの悪さは、女性には特有のものか
も知れない。勿論、心から嬉しいのだけれども、何か恥ちずかしい、というような感じであ
り、それは、例えば、妊娠を夫や家族などに告げるような時もそうかも知れない。)

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しか
しKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪たまらないと考えまし
た。奥さんはまたその位の事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。

幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。(そのように突き動かすのは、まさに先生の「良心」であるが)、私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭になったのです。(このようなところも、あとあと後悔することにもなるのだろう。)

四十七、奥さんはKに二人の結婚話をする

「……私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしななければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに氣のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったので、しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑つた事をぜひと周囲の人に知られなければならない窮境に陥つたのです。私はあくまで滑つた事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかつたのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙つて知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがと言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。(本文)

*

*

さて、「……私はそのまま一、二日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素は抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもつていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は自分で自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えたのでした。

つまり、先生の「知性や理性」(或いは「良心」)では、自分とお嬢さんとの関係(経緯)をKには話さなければいけないと思いつながら、一方、先生の「利己的自我」(つまり「エゴ」)の方では、それを話せば、自分の「立場や面目或いは信用」などを失ってしまう、それは絶対に避けなければならない。それゆえ、結局、わが身可愛さ(保身)からKには何も話さないことになつてしまつたのである。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。いわば道を外してしまつた、もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついてゐるものは、今のところただ天と私の心だけだったので。つまり、他人はいくらでも騙せても自分を騙すことはでき得ないのである。しかし立ち直つて、もう一步前へ踏み出そうとするには、

今滑った事をぜひと周囲の人に知らなければならぬ窮境に陥ったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。(この記憶があるいは先生をより苦しめたかも知れない。)

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないが言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただまま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言っただけです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。

三、結婚話聞いた時のKの反応

さて、私が奥さんに話をした日から二、三日が過ぎ、その間はKに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていました。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置にいました。しかし倫理的に弱点をもっている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えると、なぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。奥さんは、「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」。私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんの言うところを総合すると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただまま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚はいつですか」と聞いたそうです。それ

から「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐すわっていた私は、その話を聞いて胸むねが塞ふさがるような苦くしさを覚え
ました。

さて、この場面は、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時の、Kという人の反応であるが、まず、「……道理で妾めかけが話したら変な顔をしていましたよ」とある。奥さんは、当然、先生は、親友であるKにその話はしているはずだと思っていたので、そうではなかったことに少なからず驚おどろいているのである。それが次の言葉であり、「……あなたもよくないじゃありませんか。平生へいせいあんなに親しくしている間柄なのに、黙もくって知らん顔をしているのは」となるのである。この時、奥さんは、二人の間に「何かあったのかな？」ぐら
いは思ったとしても、まさかKという人が「お嬢さんに切ない恋心」を抱いだいていたなどは、全く想像すらでき得なかつたではない。だからこそ、Kという人に「……あなたも喜んで下さい」と言うのであるが、この言葉は、奥さんという人の「思いや考え」は、「先生とお嬢さんとの結婚」を望んで、いたという確かな証拠であり、それゆえ、たとえKが「お嬢さんとの結婚」を望んだとしても、そういうことは永遠にあり得ない話であることを、この時にはっきりと思い知らされたのである。（なぜなら、母親が結婚相手を決めるからである）。それが次の「Kの表情」であり、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら、「……おめでどうございます」（これは奥さんの願いが叶かなったことに対しておめでどうございます）と言ったまま席を立つたことになるが、それと同時に、この「……彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら」というのは、もう一方では、Kという人は、「理想」と「現実」との間で深く悩み苦しんでいたが、そういう自分自身が馬鹿ばかみ
たいに思おもえて来たという事でもある。その後、「……結婚はいつですか」と聞いている。これは、（恐らく）自然と出て来た言葉かと思うが、「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったのは、Kの「複雑な思い」（それは二人の結婚を表向きは祝いわいが心の底からは祝いわえない複雑な気持ち）の表れかも知れない。
ところで、奥さんの言うところを総合すると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚おどろきをもって迎むかえたらしく、Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったとある。このKという人の「反応」は、一体、何を意味するのかと問えば、恐らく、自分の知らないところで、「……そういうことになっていったのか」という反応かと思うが、「変な顔」をしていたのは、なぜどうしてそういうことになったのかその「経緯」がよく分からないので、いわば「変な顔」になつていたが、奥さんの「……あなたも喜んで下さい」という言葉を聞いて、その「謎」（奥さんも望んでいた事）がはつきりとしたので、Kという人は、「……はじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら」となるのである。それでは、Kという人は、親友の先生を「恨うらんだのだろうか？」という大問題が残るが、恐らく、先生を「恨うらむ」というよりも、むしろ「理想」と「現実」との間で深く悩み苦しんでいたという、そういう自分自身の「愚おろかしさ」を恨うらんだかも知れない。つまり、本来、子供の頃からの「理想」（道への精進）を一心に邁進まいしんすべきだったのに、ふと目の前の「色恋」に深く迷まよってしまった自分自身の「意志薄弱いしはくさ」（薄志弱行）に失望したかも知れないのである。

*

*

四十八、Kの自殺

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったもので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。」

「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突つ伏しているのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切り取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かつたと思ひました。(固より世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するとうただけなのです。それから今まで私に世話になつた礼が、極あつさりとした文句でその後に加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれと

いう句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした。

私は顫える手で、手紙を巻き取めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆目の眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖に迸っている血潮を始めて見たのです。(本文)

*

*

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日、余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまつたのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの「黒い姿」はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突ッ伏しているのです。(この状態では、Kの「顔の様子」を見ることは出来ない。)

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おい、どうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の告白」を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らししました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

これは、自分のこれからの「人生」は、いわゆる「明るい光」に照らされた希望に満ちた人生などではなくて、むしろ逆に、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」が、その一瞬、私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らし出して、自分の「全生涯」は、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」に照らされた暗い「人生」を生きることになるという想いに襲われたのである。それは、例えば、自分の不注意から交通事故

などで何人もの人を死傷させたような時、その瞬間、「……あつ、これで自分の人生は終わってしまった」という想いに襲われるのと、基本的には全く同じ心理なのである。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ「机の上に置いてある手紙」に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かった」と思いました。(固より世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。世間から「責められる証拠」が残らなかつたからである。)

手紙の「内容」は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は「……薄志弱行で到底先行の望みがないから、自殺する」というだけなのです。それから今まで私に世話になつた札が、極あつさりとした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句(文句)もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私の「もつとも痛切に感じた」のは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える「……もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という意味の文句でした。(これが「Kの自殺」の謎を解く「最大の手がかり」となるものである。)

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆な眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に

四十九、奥さんにKの自殺を告げる

「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座敷の中をぐるぐる廻らなければならぬと思ひました。檻の中へ入れられた熊のような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有

様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言って注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不着の羽織を引つ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顛で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かったです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言いました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそう言ってしまったのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとって幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじやありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攫んでいました。(本文)

*

*

さて、「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかったのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変わらない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能(五感)を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された「運命の恐ろしさ」を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座

敷の中をぐるぐる廻らなければならなくなつたのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。——私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。そして、私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不斷着の羽織を引っ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顔で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは着い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙つていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉、口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。「これは、先生の「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などからつき動かされて生じて来た行為（言動）になるかと思う」。奥さんがそんな深い意味に「私の言葉」を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攪んでいました。

例えば、万が一にもKと先生との間に何かがあつたとしても、奥さんとしては、結局、先生の方を信じるしかないのです、それゆえ、Kの「自殺の原因」をあれこれ問うよりも、むしろ「不慮の出来事」として受け止めたかつたのかも知れない。

五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処

「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこは

そのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行きましました。また警察へも行きましました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分にとられる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつたかと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふそうでは怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠つていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入つていたのでした。それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪いて月々私の懺悔を新たにされたのです。今まで構い付けなかつたKを、私が万事世話をした来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みましました。奥さんは私の

後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行ききました。また警察へも行ききました。しかしみんな奥さんに命令されて行ったのです。(まだ若い大学生であった先生という人は、何をどうして良いか何も分からずに、ただ八畳の室を意味なく歩き廻っていただけでしたが)、奥さんはそうした手続の済むまで、誰も「Kの部屋」へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまったのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸ったものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。「先生は、この現場を直接見てしまった。その為、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にその情景が鮮明に焼き付いてしまった。いくら取り除こうとしても取り除けなかつたに違いない。」

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。(これも奥さんの指示であり、まだ若い先生には実家に電報を打つという発想自体生じなかつたに違いない。)

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香を立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲られた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分が誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいதாக知れませんが。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。(やっと人間らしい感情が戻つて来たのである。)

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつた心の中で思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふ。私はずれでも怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠っていたのです。(先生はなぜかこの意識が非常に強くて、お嬢さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けるのである。)

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の

生きている限り、Kの墓の前に跪ひざまずいて月々私の懺悔ざんげを新たにされたかったです。今まで構かまい付けなかったKを、私が万事世話をした来たという義理ぎりもあつたのでしよう、Kの父も兄も私の言う事を聞いてくれました。（この箇所か所は、なぜ雑司ぞうしヶ谷がやに「Kの墓」があるのかという、その理由説明しやうめいになっているかと思う。）

*

*

一、Kの死の場面の要約

一、Kの死の場面の要約

さて、奥さんがKに話をしてからもう二日余りになり、その間、Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずでした。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきものであり、彼と私の頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。そして、「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。

私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然します。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、Kと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間の間に、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に脇を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つて居るのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つて居るのです。そうしてK自身は向うむきに突伏して居るのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行き、そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の自白」を聞かされた時のそれとほぼ同じであり、私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという（後悔の）「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らしました。そうして私はがたがたと顫え出したのです。

それから、私はすぐ机の上に置いてある「手紙」に眼を着けて、私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かつた」と思いました。

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆の眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に迸つている血潮を始めて見たのでした。

*

*

私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏しになつて居る彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能（五感）を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された「運

命の恐ろしさ」(Kの死を一生背負つて生きねばならない運命)を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰り、そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。その間に自分の室の洋燈を点て、それから時計を折々見ました。私の起きた時間は、正確に分らないのですが、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではないかと思ひ悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不断着の羽織を引掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へ這入るや否や、奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げ、奥さんは何だと聞きました。私は顎で隣の室を指すようにして、

「……驚いちゃいけません」と言い、奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫まる事出来ないうちは、こうして奥さんとお嬢さんに詫なければいられなくなつたのだと思つて下さい。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられ、硬く筋肉を攫んでいました。

*

*

私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中はほとんど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし入ろうとはしません。そこはそのままにして置いて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得ていました。私は医者、の所へも行き、また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分が誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた「私の心」に、「一滴の潤いを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。私はお嬢さんに昨夜の物凄い有様を見せずに済んで、よかつたと心の内で思いました。」

二、その結末

さて、先生は、とにかくも、この二つの「反撃」を以って、親友である「K」を攻撃し、その結果として、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲われ、その「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)というものに長く悩まされ続けることになるのである。——それは、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」を裏切るような「行動」(言動)をしてしまったのである。それによって、親友を「死」へと追いやったという「意識」(つまりは「罪の意識」)に悩まされ続けているのである。——すなわち、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」。なぜなら、自分自身、いざという間に、急に「悪人」になってしまったからである。その結果、親友を「死」へと追いやるような結果になってしまった事を悩み苦しむことにもなるのである。

*

*

それは、第三部の「本文」では、次のようになっていいる。つまり、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている」。そして、「……叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、しかし、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまったって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです」とある。——つまり、ここで最も大事なことは、叔父に裏切られた時には、他人というものは、つくづく「当てや頼み」にならないものだと思底からそう感じ、相手を心から「恨み、憎んだり」もしたが、しかし、世間(や他人)はたとえどうであろうとも、この己(自分自身)は、立派な人間(そんな悪いことなど絶対にしない人間)という「信念」(確信)がどこかにあったのである。

ところが、先生とお嬢さんとKとの「三角関係」のなかで、先生は、前述のような「二つの反撃」を以って、親友である「K」を意識的に攻撃してしまった。それは、何が何でもお嬢さんを失いたくないために、(ふだんの自分ならそんなことは絶対にしないだろうと信じていた自分)が、いざという間に、急に「悪人」(つまり「他を騙したり、貶めるような人間)に変わってしまったのである。この「衝撃」、つまり、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、つくづく他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」

を裏切るような「行動」（言動）を意識的にしてしまっただけのこと。この「衝撃」、そして、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。——それは、Kが「自殺」をした後、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまつたのは、誰でもない、この「自分自身」であるという「意識」に強く襲われ、そして、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」というものに、先生という人は、ずっと長く何年も悩まされ続けることになるのである。

三、お嬢さんの気持ち

それでは、お嬢さんの「気持ち」は、いったいどういうものだったのか？ この問題を、もう一度、確かめておきたいと思うが、まず、「K」と「先生」、そのどちらにより強い「想い」を寄せていたのだろうか？ それは、どちらというよりも、お嬢さんの「気持ち」というのは、一貫して、「先生」だけにしか向いていないのである。それゆえ、「先生」という人も、あれこれ「策を弄する必要」などまったくなかったのである。——つまり、お嬢さんが「心の底から愛していた」のは、「K」ではなく、まさに「先生」その人だけだったのである。それゆえ、たとえ「K」がお嬢さんに「愛を告白」したとしても、恐らく、お嬢さんは、その「告白」（申し入れ）をきっぱりと断つたに違いない。そのことを「K」は、うすうす感じていたのだろう。だからこそ、「自殺」ができていたのである。「自殺」というのは、まさに「ここで自分の人生を終わらせる」ということであり、若しもお嬢さんに「愛を告白」して、それを受け入れてもらえる何らかの「自信」（或いは「可能性」）があると思っていたならば、敢えて「自殺」（ここで自分の人生を終わらせる）理由などどこにもないのである。いくらでも「打つ手」はあるからである。

例えば、お嬢さんの前で、仮に「……お嬢さんを心から愛しています。ぼくと結婚してください」と二人が同時に、まさに「求婚」（プロポーズ）をしたとしても、お嬢さんは、間違いないで、「先生」を選ぶだろうということを、はつきりと感じていたのである。だからこそ、「自殺」ができていたのである。それは、「……明日（将来）に渡って希望が持たない」からこそ、まさに「自殺」が出来るのである。——つまり、「K」という人物は、いわば修行僧のような若者であり、頭も良く、努力家で、まじめで、正直で、忍耐強くもあるが、一方では、無口で、孤独で、非社交的で、友だちもなく、精神的には「神経衰弱」気味でもあり、しかも、親からは勘当されているという、いわば「八方ふさがり」の状態であり、そのようななかで、お嬢さんへの「恋心」は、誰よりも自分が一番驚いたに違いない。自分でも自分の「心」を持って余していたかと思うが、それゆえ、親友である「先生」に「胸の内」を打ち明けているのである。そして、「K」としては、出来るなら、ここを突破口として、「八方ふさがり」の状態を何とか打開し、新しい「人生」を切り開きたかったのかも知れない。しかし、その「望み」は、完全に絶たれて、遺書の言葉では、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」となるのである。

四、Kの遺書

さて、Kの机の上に置いてあった「遺書」の内容は、やはり「重要」なものであり、それゆえ、その一つ一つを丁寧に見ていきたいと思うが。まず、全体の内容は、次のようなものである。「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後につけ加えてありました。奥さんに迷惑をかけて済まんからよろしく詫びをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。ただ、お嬢さんの名前だけはどこにも見えません。Kがわざと回避したのだと気づきました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした」とある。

まず、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」とある。これは、まさに自分の「薄志弱行」(それは「意志が弱くて実行出来ないでいる」という「意味合い」になるかと思うが、Kの場合、本文では、次のようになっていて、つまり、図書館にいた先生を呼び出しては、二人で散歩することになるが、そこで「……彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たのです。というのも、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱くでき上ってはいなかったし、こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸も勇氣もある男なのです。私がKに向って、この際何んで私の批判が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言いました。私は隙かさず迷う、という意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました」とある。それでは、なぜ、Kはその「一歩」(お嬢さんへの愛の告白)をためらっているのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、Kという人は、所謂「理想」(それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」(それは「お嬢さんへの切ない恋心」との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、Kは、「それをどう思うか、また、どうしたらよいか」と、親友である「先生」に聞いているのであり、それを一言で言えば、まさに「……Kは現在の自分について、先生の批評を求めている」ということである。それでは、なぜ「先生」にわざわざ批評を求めたのか？ それは、「先生」の「心の中」もせひとも知りたかったからでもあるのだろう。そして、ふつうに考えれば、「K」という人が「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、もちろん、これが「大部分」を占めるかと思うが、それに加えて、「先生」との関係もあるのである。それは、親友である「先生」も「お嬢さんのことが好きであるだろう」ことは、うすうすは感じていたであろう。だからこそ、先生の「心の中」もせひとも知りたかったのである。その結果、(反撃する)先生という人の「心の中」をはっきりと知ったのである。

例えば、若しも「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」のことは諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に「辛い」ことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。そのように、われわれ人間の「心の中」というのは、たった一つだけの「想い」だけではなく、実際は、実に様々な「想い」が複雑に同時に存在しているのである。

そして、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

*

*

さて、もう一つの理由は、まさに「養子先でも実家でもさらに唯一の親友とも結局は人間関係で破綻をし」、この世に「頼れる」（或いは「心の支え」となる人間もいなくなり、まさに「八方ふさがり」状態で、これから何をどうやって生きていけばよいかも分からず、ただ深く悩み苦しみ揺れ動いている自分の「心の弱さ」ゆえ、自殺するということでもある。そして、世話になった先生へのお礼、また、奥さんに迷惑をかけることになってしまったお詫び、国元への連絡、その他、あとのことは、すべて「先生」に任せるとある。これは、一体、どういうことなのか？ 「K」は、お寺の子として生まれている。そして、中学の頃、医師の家に養子としてもらわれていく。この時に、すでに親への「不信・不満」があったかも知れない。そして、養子先の「親」への「不信・不満」もあつたかも知れない。だからこそ、大学は、「医学部」へ入れと言われていたにも関わらず、それに従わず、そのために、養子縁組は破綻し、また、実家の親からは勘当されてしまう。Kの「孤独」は、その「生い立ち」から生じている。Kの「実の母親」は、すでに死んでいて、父親と継母に育てられるなかで、まさに「継母」との確執、養子に出される衝撃（それは「父親は実の子である自分よりも女の方を選んだという衝撃）、その他から、恐らく、「親」（或いは「人間」）が信じられない、というような意識が自然と生じて来て、だからこそ、誰にも依存しない、まさに「独立独歩の道」を心がけていたということである。それが、まさに「お嬢さんへの恋心」でもろくも崩れてしまったということである。

それは、本文でも、「……Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔たりが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです」とある。そして、その「八方ふさがり」状態であった「K」にとつて、子供の頃からの「親友」である「先生」という存在は、何者にも換え難い存在であり、この世で唯一信じられる「人間」（或いは「友達」）であるという思いがあつたかも知れない。

そして、先生と「K」とは「同じ家」に同居することになるが、「K」は、その奥さんやお嬢さんともほんの少しずつ打ち溶けていくようになる。それは、「K」に人間らしくなってもらうために、先生がわざわざ奥さんやお嬢さんにお願したことであつた。そして、ここまでは、すべてが順調に行っていたのである。ところが、先生の「大誤算」は、まさかKが「お嬢さんに恋心」を抱くなどということとは、「K」の日頃の「言動」からす

れば、どうしても想像でき得なかつたに違いない。だからこそ、「K」の「告白」を聞いた時に、先生は、「……ああ失策^{しま}つた、先越^{さき}された」という思いに襲われるのである。そして、この時点から、先生のKに対する「態度」は、大きく変わってしまうのであり、それは、まさに子供の頃からの「親友」から絶対に負けることの出来ない「恋敵」(敵同士)へと大きく変化してしまつたのである。——ところが、「K」の方は、それとは気づかずに、今まで通りの「親友」として「先生」を見ていたのである。だからこそ、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであつた。この時の「K」は、まるで「隙^{すき}だらけ」だつたと言つてゐる。その「隙」に襲いかかつたのである。そして、もう「一撃」は、「K」より先に、奥さんに「……お嬢さんをください」と願ひ出ることであつたが、それは、奥さんも、お嬢さんも、その「言葉」をずっと待つていたということでもあるのだろう。

五、自殺の動機

さて、先生の、この二つの「反撃」が、「K」に一体どのような「衝撃」を与えたのかは、厳密にはよく分らない。ただ、「K」は、奥さんから二人の結婚話を聞いてから二日後に、「自殺」をしている。それでは、「K」は、なぜ「自殺」を凶つたのか？ それが、まさに「最大の謎」であるが、その「謎を解くヒント」は、意外と次の言葉の中に隠されている。——それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨^{すみ}の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまつたということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になつてしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなつてしまつた、いわば完全なる「孤独」に深く陥つてしまつたからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとつて、まさに最後の「一押し」となつて、ついに「自殺」を遂行してしまつたのである。そして、先生は、そのことやがて気づくことになるが、それは、つまり、自分が最後の「一押し」をしてしまつたという思いである。だからこそ、先生は、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に何年も襲われ続けているのである。

一方、「K」という人は、先生を「恨んで」はいないのである。若しも心の底から恨んでいたら、死後のすべてを先生に託すわけがない。例えば、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時も、これは、これで「なるべくしてなつた結果」なのだ、かえつて「諦め」がついたかも知れない。——つまり、先生とお嬢さんが結びつくのが自然であり、一方、自分とお嬢さんが結びつくことなどは、ほとんどあり得ない話だということは、その

時にはつきりと知ったに違いない。(それは奥さんが「……あなたも喜んで下さい」と言った時である)。ただ、「K」という人は、自分の「心の中」に生じて来た「お嬢さんへの切ない恋心」というものをどうしたものか、自分でもどうにも持て余すようになり、そこで、親友である「先生」にどうしたものかと打ち明けているのである。ところが、一方の「先生」は、Kの「告白」を、むしろ恋の「宣戦布告」のように思い込んでしまい、まさに「戦闘体制」に入ってしまったのである。そして、いわゆる二つの「反撃」によって、先生は、お嬢さんを得て、一方の「K」は、やがて「自殺」を遂行することになるのです。そして、先生は、「……恋は罪悪である」と言っている。それは、異性を「本気で愛する」ようになれば、必ず、「……誰かが傷つくことになる。誰かを傷つけずにはおかないもの」だからである。だからこそ、「……恋(恋愛)は、罪悪なのである」。

六、先生「夫婦」

ところで、先生「夫婦」には「子供」がいなかった。それは、例えば、仮に、奥さんが、「……なぜ、私を抱いてくれないのですか？」と訊ねた時に、先生は、無条件で「妻」を抱くことが出来なかった。それは、一体、なぜなのか？ それは、「妻」を抱こうとする、死んだKの「亡霊」が目の前にちらつくからである。それゆえ、「妻」を抱きたくとも抱くことができないのである。それを先生は、「天罰」だと呼んでいるのである。

それは、「第一部」の本文では、次のようになっていいる。つまり、先生の宅は夫婦と下女だけであった。行くたびに大抵はひっそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。(これは、奥さんの本音であり、この言葉に対して、先生の反応を見ているのである)。私は「そうですな」と答えた。「……一人貰ってやるうか」と先生が言った。「……貰ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。(これは、先生の子供こそ欲しいのであり、他人の子供が欲しい訳ではないのである)。「……子供はいつまで経つてもできっこないよ」と先生は言った。奥さんは黙っていた。「……なぜです」と私が代わりに聞いた時先生は「……天罰だからさ」と言って高く笑ったとある。

また、お嬢さんは、母親から時々氣拙いことを言われることもあったらしいとも書いてある。それは、結局、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのですか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことを言われていたのである。奥さんは、歯痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどこが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところはつきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦

らめさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを
得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまった。そのような経緯を知ったならば、お嬢さん
は、間違いなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そう
なれば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)
に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何が何でも避けたかったのである。それは、
奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持って行く」という選択をしたとい
うことである。どちらがよかったのか？ それは、分からない。しかし、若しもこの「先
生」という人に、何らかの「問題」(欠点)があるとするれば、それは、「……言うべき時
に言うべきことをはつきりと言うことをためらったこと、そして、言うべきではなかった
ことを敢えて言ってしまった」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、
「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に悩まされ続けているのである。

*

*

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて教えてくれました。忙しいので、殆んど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言ひ出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃つてお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言うのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗つてやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになつた顛末を述べてKに喜んでもらつつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かつたと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではない

のですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨を思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。(本文)

*

*

まず、前の章の最後のところで、「……国元からKの父と兄が出て来た時、Kの遺骨をどこへ埋めるかについては、彼の生前、雑司ヶ谷近辺をよく一緒に散歩した時、Kはそこが大変気に入り、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあったと告げて、その約束通りにKを雑司ヶ谷に葬ったとともに、私の生きている限り、Kの墓の前に跪ずいて月々私の懺悔を新たにしていたかった」とある。(先生は、それ以来、命日、必ず月に一回の「墓参り」をずっと欠かさず続けているのである。)

さて、「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだらうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早く「お前が殺した」と白状してしまえという声を聞いたのです。

例えば、病気で亡くなった場合には、殆どの場合、その原因(病名)ははっきりとしているので、敢えて「なぜ、どうして？」と問う人も少ないかと思うが、一方、自殺で亡くなった場合には、必ず、誰でも「なぜ、どうして？」と問わずにはいられないものがあるのである、それは、その「自殺」の「動機」(原因)がはっきりとしない場合が非常に多いからであり、たとえKのように「遺書」を残したとしても、本当にそれだけなのか、ほかに何か理由があるのではないかとあれこれ疑いが次から次と生じて来るものである。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂って自殺したと書いた新聞があると言つて教えてくれました。忙しいので、殆ど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかっていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。(前の所を厭がるのは、ごく自然で無理からぬ感情かと思う。)

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだ

のですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたが、私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言いました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃ってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言うのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。（先生は、新しい家へ移って二カ月ほど無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、今度はめでたにお嬢さんと結婚することになり、奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども、私の幸福には不吉な「黒い影」がずつと随きまどつていたのです。）

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末を述べてKに喜んでもらおうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ「自分が悪かった」と繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後、決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

それは、先生とお嬢さんとの仲睦まじい姿は、墓の中に眠っているKの気持ちをかえって苦しめることにもなるだろう。先生が毎月欠かさず墓参りに行くのは、ただただ（すまないという）「懺悔」の気持ちだけであり、それ以外の理由は何もないのである。

五十二、Kの亡霊から逃れるために読書を……

「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言え言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思ったのです。ところがいいよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手敵しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかという詰問を受けました。笑って済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の痛も高じて来ます。しまいには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言

も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしぎとという間際になると自分以外の力がある力が不意に来て私を抑え付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己れを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それを敢えてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一票の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経つてもKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐つていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全くそこにはなかったのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうあるうともこの己は立派な人間だという信念がどこにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。(本文)

*

*

さて、「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言えと言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、これによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。ところがいよいよよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手厳しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。

「……私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。(これが妻を抱けない理由であり、先生はこの事をまさに天罰と呼んでいるのである)。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかとかいう詰問を受けました」とある。そして、笑つて済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の癩も高

じて来ます。終いには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外の「ある力」が不意に来て私を抑え付けるのです。（それは、先生の「良心」であるが、あるが、まを妻に語れば、今度は「妻」が先生と同じような「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）に深く悩み苦しむことにもなるからである。）

私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。——その時分の私は妻に対して己を飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。それを敢えてしない私に「利害の打算」があるはずはありません。私はただ妻の記憶に「暗黒な一点」を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに「零の印気」でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

つまり、先生という人は、奥さんをまさに「純白なもの」（つまり「100%純白な存在」として見ているのである。しかし、それが誰であれ、いわゆる「100%純白な存在」というのは、あり得ないのであり、それゆえ、もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。——だとすれば、この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れないのである。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦めさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを、得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまう。そのような経緯を知ったならば、お嬢さんは、間違ひなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そうなれば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何が何でも避けたかつたのである。それは、奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持つて行く」という選択をしたという事である。どちらがよかつたのか？ それは、分からない。しかし、もし、この「先生」という人に何らかの「問題」（欠点）があるとすれば、それは、「……言うべき時に言うべきことをはつきりと言うことをためらつたこと、そして、言うべきではなかつたことを敢えて言つてしまつた」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）に悩まされ続けているのである。

一年経つてもKを忘れる事の出来なかつた私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために「書物」に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもって勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理

に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても「書物」のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいいは坐っていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。（これは妻から見た「外的事実」である）。私も幾分かスポイルされた気味がありましよう。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして「動けなくなつた」のです。

例えば、第一部で先生は、「……私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がない」という謎めいた言葉があつたが、その「資格がない男」という言葉の真意は、まさに次のようなことである。——つまり、叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ないが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。つまり、社会に出て積極的に世間に働きかけるような仕事が出来なくなつてしまつたのです。なぜなら、自分は「……親友を裏切り自殺へと追いやったような人間だから」である。（これがまさに内から見た先生自身の「内的事実」になるのである。）

五十三、Kの亡霊から逃れるために飲酒を……

「……書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲む質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽つてゐる愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまします。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。

妻の母は時々気拙い事を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいのです。責めると言つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆ん

どなかつたくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なく言ってくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めると忠告しました。ある時は泣いて「…あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「…Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していかないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中になつた一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つて見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたつた一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。(本文)

*

*

さて、「…書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽っている愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。(今度は酒で過去を忘れようとしたが出来なかつた。)

妻の母は、時々「氣拙い事」を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分(妻)は自分(妻)で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいので

す。責めると言っても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆んどなかったくらいですから。妻は「たびたびどが気に入らないのか、遠慮なく言ってくれ」と私に頼みました。

まず、妻の母からは、時々「気拙い事」を妻に言うようでした。むろん、その内容には色々なことがあったかと思うが、その中でも、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのでか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことも言われていたに違いない。奥さんは、歯痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度も頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところが、つきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それから（妻は）私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「……あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「……Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。（身も心も深く寄り添えるのが夫婦の幸せである。）

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いしました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段（告白）があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。（これは、いわば心からの「孤独感」であるが、それも妻との「心のコミュニケーション」を避けているからである。）

同時に私はKの「死因」を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ「恋の一字」で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく「失恋」のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた（心からの「孤独感」の結果、急に所決したのではなかるうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚（予感）が、折々風のように私の胸を横過

り始めたからです。(Kの自殺の要因は、次のようなものになるかと思う。)

それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の実家にいた頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまったということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になってしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなってしまった、いわば完全なる「孤独」に深く陥ってしまったからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとって、まさに最後の、「一押し」となって、ついにKは「自殺」を遂行してしまったのである。

*

*

五十四、奥さんの病氣と死

五十四、奥さんの病氣と死

「……その内妻さいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とちうていらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありませんし、また愛する妻のためでもありませんが、もつと大きな意味から言うのと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくって堪たまらなかったのだけれども、何もする事が出来ないのでやむをえず、懐ふしう手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨うらみしました。

母の亡くなつた後あと、私は出来るだけ妻を親切に取り扱つてやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたらとところで、この物足りなさは増すとも減る氣遣きづかいはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言ひました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧あいまいな返事しておきました。妻は自分の過去を振り返つて眺ながめているようでしたが、やがて微かな溜息ためいきを洩もりました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影ひらめが閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲つて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心はその物凄ものすごい閃ひらめきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるものの如ごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭あたまがどうかしたのではなからうかと疑うたぐつて見ました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらはう氣にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓まいづつへ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります。こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭むちうたれるよりも、自分で自分を鞭むちうつべきだという考かんがえが起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行くことと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。(本文)

*

*

さて、「……その内妻の母が病気になりました。医者に見せると到底癒らないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありました。もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくって堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないでやむをえず、懐手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも「善い事」をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分、支配されていたのです。(これは、自分の過去の「罪深さ」などを自覚(悔い)て、その「罪滅し」として、人間や社会のために少しでも「善い事」をしたいという心理になるのである。)

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人(あなた)しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないので。妻は泣きました。私が不断からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨みましたとある。

これは、普通の夫婦であれば当然(心身共)もつと「親密な関係」が持てたはずであるが、先生の場合、妻との間に或る「一定の距離」を保たなければならぬ理由があり、その理由を妻に説明してやる事も出来ない状況なので、妻のことを「不幸な女だ」(それは「夫と親密な関係」が持っていないから)と言っているのである。一方、妻は、なぜと聞くのは、奥さんにしてみれば、夫からお前は「不幸な女」だと言われる程のことではなく、毎日何不自由なくそれなりに楽しく暮らせてはいるからである。

母の亡くなつた後、私は出来るだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人を離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たに似たところで、この物足りなさは増すとも減る気遣いはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

さて、この「……女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われます」とあるが、もしそうであるならば、——例えば、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」

関係になれたかも知れない。そうなれば、先生という人は、やがて「Kへの亡霊」からも少しづつ解放されて、何とか妻を抱くこともでき得るようになったかも知れないのです。しかし、先生という人は、何よりも奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたという選択をしたのである。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言いました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事しておきました。妻は自分の過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑って見ました。けれども私は医者にも誰にも診てもらおう気にはなりませんでした。

この「恐ろしい影」とは、恐らく、「死の影」であり、初めはそれが偶然外から襲って来て、私は驚きました。私はぞつとしました。しかし、しばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。つまり、その「死の影」には、最初は驚き、ぞつとしたものであるが、やがてそれは自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われて来ては、終には「自殺願望」へと変貌してしまうのである。その「心の推移」を表現したものが、まさに「次の文章」になるかと思う。

つまり、「……私はただ人間の罪、というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思った事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つべきだという気になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。（このような段階を経て、やがて「自殺願望」が生じて来るのであるが、しかし、今はまだ「……死んだ気で生きて行こうと決心する」のである。）

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒（永遠に解けない謎）のように見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。

五十五、うつ脳の牢獄に閉じ込められて

「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思いつくや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言うて聞かせます。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるうとすると、ま

た締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思つて下さい。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としている事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまで二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので、妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括つ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にそう言いました。妻は笑つて取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよかろうと調戲しました。(本文)

*

*

さて、「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうし

てその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言っただけです。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまします。しばらくしてまた立ち上がるかとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。(それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「知性や理性」(特に「良心」)であり、その先生の「良心」こそは、まさに「先生を許さない」のである。)

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい、戦争があったものと思っして下さい。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとつて一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。(これは、妻を道連れにした「無理心中」は避けたということである。)

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまします。そうして妻から時々物足りなさそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも「黒い影」(死の影)が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いて来た(生き長らえた)ようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。「……九月になったらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う氣でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです」とある。

つまり、先生という人は、その時点までは、「自殺」のことはまだ考えてはいなかつたのである。——ところが、夏の暑い盛りに明治天皇が「崩御」されて、その約一ヶ月半後の「御大葬」の夜に乃木大将の「殉死」を号外で知ることになるが、その「殉死」という言葉によって、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にあった「自殺願望」というものがふと呼び覚まされることになってしまったのである。(それが次以降の文章である。)

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にそう言いました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよからうと調戲しました。(この「殉死」という言葉が、先生の「人生」を一気に激変させる大きな要因の一つになって行くのである。)

五十六、乃木大将の殉死を契機に自殺を決心する

「……私は殉死という言葉を残んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを感じ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月(半)ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたので。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間、死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人に取つて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人のもつて生れた性格の相違と言つた方が確かかも知れません。私の出来る限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。

私は妻を残して行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こつそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたいのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります。その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でしたのですが、書いてみると、却つてその方が自分を判然描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、そ

れを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思えます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来まじょうが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです。私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。(未完)

*

*

さて、「……私は殉死という言葉を残んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月(半)ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたので。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。(殉死は、主君や夫などの死を追つて臣下や妻などが死ぬことであるが、それは、自分の「衷心」(誠)を示す行為でもある。)

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間、死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人のもつて生れた性格の相違と言つた方が確かかも知れません。私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。(自殺の理由は、決して一つだけではなく、実際は、実に様

々なものが複合的に作用し合って、最後の「一押し」で遂行してしまうものである。」

私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

さて、この「……私は妻に血の色を見せないで死ぬつもり」とあるが、先生自身は、Kの自殺の時に飛び散った血潮の凄まじさを見ているのであり、それが先生の「頭の中」（或いは「心の中」）に鮮明に焼き付くように残つてしまい、その生々しい記憶のために、先生自身なおさら深く悩み苦しむことにもなったのかも知れない。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でしたのですが、書いてみると、却つてこの方が自分を判然描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思えます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来ましようが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰つて来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を「善悪」ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なので、すから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。

つまり、先生という人は、「……私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです」ということになるのです。(完)

*

*

一、先生の自殺

一、先生の自殺

それでは、「先生」という人は、なぜ、「自殺」をしたのだろうか？ それも、結局は、まさに「……明日（将来）に渡って希望が持てない」からである。それでは、その「希望」とは、一体、何なのかと敢えて問えば、それは、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものは、まさに「半永久的」に消えない。その「苦しみ」から開放される「希望」が全く持てないということである。だからこそ、まさに「自殺」（つまり「ここで自分の人生を終わらせる」ということ）になるのである。

例えば、乃木大将の場合にも、それは、「……西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きてしまった」とある。——つまり、何度も何度も自殺をしようと思いつながらも、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、たまたま明治天皇が崩御されたのを「切っ掛け」として、それから約一カ月半後、「御大葬」の夜、まさに「殉死」という形で「自殺」することができたということである。それは、「Kの場合」も全く同じことであり、何度も「自殺」しようと思いつながらも、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、先生との「一連の出来事」で、まさに自殺する「切っ掛け」が出来たということである。

そして、それは、先生の場合も同じことであり、その「切っ掛け」となったものは、一つは、まさに明治天皇「崩御」と乃木大将の「殉死」報道であるが、それ以上に大事なことは、先生の場合は、自分の「心の底」にあった「想い」を語つてもよいと思える「私」という存在が出来たということである。——つまり、先生も、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」が誰もいなかったということである。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を（遺書」という形で）語ることができ得るかも知れないという、そういう「機会」（つまり「自殺できる機会」）が得られたので、まさに「自殺」を遂行してしまつたのである。つまり、自殺しようと思つていても、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られなかつたが、「私」という若者が出来たことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語つてもよいと思つて来たということである。しかし、いつどこでどのような形で語るのか？ つまり、直接会つて語るのか、それとも、手紙のようなもので語るのか。そのようなことをあれこれ考えているうちに、（実際、一度は、彼に直接話そうとして電報を打つたが、父親が重篤で来られないということ）で、そこで、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）にふと「遺書」という形で語ることができ得るかも知れないという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを讀んだ若者も、きつと自分の「遺志」をしつかり受け留めてくれるだろうし、また、念願の「自殺」を遂行することも出来得る。つまり、すべての「願い」が同時に叶うということがある。だからこそ、先生は、「自殺」を遂行してしまつたのである。——それでは、なぜそれほどまでに「死にたい」と思うのか？ それは、先生の場合、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものが、それだけ先生にとって「耐えがたいもの」であつたとともに、いわゆる「う

つ、脳のうの牢獄のうごく」からどうしても抜け出せないという苦しみ」ということである。逆に言えば、それほどまでに自分（先生）を苦しめたものだからこそ、まさにその「ううつ、脳のうの牢獄のうごく」とそこから生じる「罪のちがひの意識のしぎ」（或いは「良心のしんしんの呵責のかしやく）」というものを、何が何でも「遺書のいしょ」のなかに「書き残しておきたかった」ということでもあるのだろう。

例えば、若い頃、「中・高時代」、非行や家庭内暴力、その他などで狂人の如く荒れ狂ったとする。そのために、やがて、母親は「病氣のびやうき」になって早死はやしにをしてしまったとする。その場合、その子供は、母親を殺したのは、誰でもない、この俺おれだという、そういう「罪のちがひの意識のしぎ」（或いは「良心のしんしんの呵責のかしやく）」に一生深く悩まされ続けることになるだろう。

つまり、その子供は、一生涯、その「罪のちがひの意識のしぎ」（或いは「良心のしんしんの呵責のかしやく）」からは、絶対に逃れることができないのである。そういう「意識」と、基本的には全く同じ「心理のしんり」なのである。

二、先生の遺書

それは、本文では次のようになっていいる。つまり、「……私はただ人間の罪のちがひというものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓のまいづつへ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍みちのぼろの人から鞭むちたれたいとまで思ったことでもあります。こうした階段をだんだん経過して行くうちに、人に鞭むちたれるよりも、自分で自分を鞭むちつべきだという気になります。自分で自分を鞭むちつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日こんにちまで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮らして来ました。私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。しかし私のもっている一点、私にとっては容易よういならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいらしいのです。それと思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします」。

死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟しげきで躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けるように言つて聞かせます。すると私はその一言で直ぐすぐたりと萎しおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔ひとをするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っている癖にと言います。私はまたぐたりとなつてしまうのです。

*

*

それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「良心のしんしん」であり、その先生の「良心のしんしん」こそは、まさに「先生を許さない」のである。なぜなら、——お前は、親友である「K」を死へと追いやつた「張本人のちがひ」（つまりは「人殺しのころし」）じゃないか！ その「人殺しのころし」であるお前が、のこのこ世間に出ていって、一体、どんなもつともらしいことを言つたりやつたり出来るといふのだ。お前には、そんな「資格のしきかく」などないことは、誰よりもお前がいちばんよく知っているはずじゃないか、と、まさに先生

の「良心」は、その度ごとに先生を責め立てるのである。……

* 波乱も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい、戦争があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢獄の中にじっとしていることがどうしても出来なくなつた時、またその牢獄をどうしても突き破ることが出来なくなつた時、畢竟私に一つて一番楽な努力で遂行できるものは自殺よりほかにないと私は感ずるようになったのです。(中略)、ただ、妻のことを思うと躊躇しました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです……」と。

* これは、実に見事な「遺書」であり、人間の「罪の意識」(或いは「良心の呵責」という「心の葛藤」を実到的確に表現しているものである。しかも、今日言うところの、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)を實に見事に表現しているものである。つまり、作者(夏目漱石)自身、この「本文」を書き遺したいたがために、この『こころ』という作品を書いたと言ってもよいほどである。

なぜなら、夏目漱石には有名な「神経衰弱」というものがあるが、それを今日の医学用語で言えば、それは、まさに「うつ病」(或いは「躁うつ病」)に他ならないのです。

つまり、「……私を生んだ私の過去が、今のような自分を生み出している」とあるが、それは、若い頃、親友を裏切り、その結果、自殺へと追いやつたという過去の経験から、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむ結果となつたと共に、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)になっていることは、人間の経験の一部分として、私よりほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、貴方にとつても、ほかの人にとつても、徒勞ではなからうと思ふのです。

それは、本文では、次のようになってゐる。つまり、「……私は何千万といふ日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言つたから」とある。すなわち、「作者」(夏目漱石)という人は、一体、誰のためにこのような「作品」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分(先生)が実際の人生の中で経験した「心の闇」(「罪と罰」)とを、敢えてここに書き遺しておきたかつたということである。

あとは、『こころ』という作品を最初から最後まで丁寧に読んでもらえれば、今までのそれぞれの「内容説明」の一つ一つが、まさに「実感」として感じてもらえるのではないかと思う。——そして、個人的には、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のようなかつて自分が書いた「文章」が、自然と浮かんで来るのである……。

三、罪と罰

さて、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けるとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないというのである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」（或いは「魂の中」）でも、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）によって厳密に吟味され続けている、内なる「審判」（つまりは「内的制裁」「罰」）を受けざるを得ないということである。それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

*

*

わが罪を

終に裁くは

内なる神か

「参考文献」

※底本「こころ」夏目漱石（「青空文庫」）

